

日本家政学会
被服構成学部会誌

第35号

平成26年3月

目 次

部会長ごあいさつ	1
次期部会長ごあいさつ	3
高橋キヨ子先生追悼	5
柳澤澄子先生追悼	6
増田茅子先生追悼	7
平成 25 年度 被服構成学協会 総会	8
平成 25 年度 被服構成学協会 夏期セミナー	
プログラム	9
講演 1 「国際標準化戦略と ISO/TC133 パリ総会報告」	10
講演 2 「我が国の人体計測の変遷と今後」	11
計測実習	12
部会員報告 1 「人体計測特別委員会中間報告」	13
講演 3 「学校制服作りの現場から」	14
講演 4 「我が国のジーンズ製造の歴史」	15
見学会 ベティスミスジーンズミュージアム	16
夏期セミナーに参加して	16
研究例会「和装の文化」	17
「家庭科への発信」	18
「きもの文化の伝承と国内外への発信ーグローバルな視点からの発信」	19
特集 「被服構成学とともに歩んだ日々を振り返る」	21
若手研究紹介 「子どもの衣生活の実態と今後の研究の展開について」	25
第 14 回全国中学生創造ものづくり教育フェア報告	27
関連学会短信	
2013 The International Textile and Apparel Association (ITAA) 年次大会	28
日本繊維製品消費者学会	29
日本衣服学会	29
平成 25 年度 研究動向 (修士論文テーマ・科学研究費補助金研究課題)	30
会務報告	32
平成 24 年度 被服構成学協会 夏期セミナー収支報告	34
貸借対照表	35
平成 24 年度 被服構成学協会 収支計算書	36
平成 25 年度 被服構成学協会 収支予算書	37
お知らせ	38
ご案内	39
被服構成学協会 規約・申し合わせ	40
平成 24・25 年度役員, 平成 26・27 年度役員	43
入会申込書および変更届, 退会届	44

部会長ごあいさつ

(一般社団法人) 日本家政学会被服構成学部会
部会長 鳴海 多恵子

平成25年度は、富士山の世界文化遺産登録や2020年東京五輪の決定など嬉しいニュースもありましたが、豪雨、竜巻、大雪被害など自然災害の猛威に社会が混乱し、便利で安全な日常の有り難さを改めて考えた年でした。このような困難な状況に遭遇した部会員もいらっしやっただことと思いますが、平成25年度の部会の活動は、お蔭様で予定した事業が計画通りに遂行されました。運営委員をはじめとする部会員の皆様方のご支援とご協力に感謝申し上げます。

夏期セミナーでは、我が国の人体計測の変遷に関する知識を深めるとともに、計測実習を行い、科学研究費補助金基盤研究Aの調査活動開始への準備を進めました。また、開催地倉敷市の主要産業である学校制服およびジーンズ生産をテーマとした当地の方のご講演を実施しました。2日間に渡る日程を通して、共に学び共に行動した時間は、研鑽は勿論のこと、部会員相互の親交を深める楽しいひとときとなったことと思います。

研究例会では、部会員の「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発に関する研究活動をご報告いただきました。国内外に広がる活動を継続的に実践しているという積極性は大きな刺激になったものと思います。現場の教員や学生の参加者からも、活発な質疑応答がなされました。

上記の夏期セミナー、研究例会は日本家政学会の活動助成金を受けて公開で行い、部会員以外の参加者を積極的に募りました。また、第65回日本家政学会研究大会活性化企画の依頼をうけ、「化粧の変遷－女性の美しさと共に－」と題して資生堂の富川 栄氏の講演と実演を企画しましたが、教室いっぱい的人数が集まり、好評のうちに終了することができました。

また、「中学生創造ものづくりフェア」への協力も引き続き行い、審査の中心的役割を担うと共に、奨励賞と部会賞の授与、および会場内での「体験コーナー」における小物作りの指導も行いました。

近年、定年退職に伴って部会を退会される方々の数に対して、入会者が思うように増えず、部会員数の減少傾向が続いています。このような状況下、本部会は安定した運営がなされ、部会員相互の親睦も深まっています。また、科研費の研究をはじめとする活動成果は、アパレル業界や教育現場への多大な貢献を果たすものと思います。しかしながら多くの部会員とともに活動をさらに広げ、充実させていくために、ご指導の学生さんをはじめ、被服関連の研究者や産業界の方などの部会への加入をお薦めくださるようお願い申し上げます。

次期部会長ごあいさつ

(一社) 日本家政学会被服構成学部会
次期部会長 森 由紀 (甲南女子大学)

花の便りがきかれる候となりました。部会員の皆様方には、新年度のご準備にお忙しいことと存じ上げます。この度、平成26・27年度の部会長を仰せつかりまして、歴代の部会長が築いてこられた重みのある歴史を引き継ぐこととなり、身の引き締まる思いです。部会の方向性を決める舵取りを果たしてうまくできますかどうか不安が先立っておりますが、次期副部会長の日本女子大学 大塚美智子先生、広島大学 鈴木明子先生、ならびに16名の運営委員の先生方とともに精一杯運営にあたらせていただきますので、部会員の皆様方のご支援・ご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

さて、ご承知のように鳴海多恵子部会長のもとで、科学研究費補助金基盤研究Aの採択を受けました5年計画の研究「アパレルの質と国際競争力向上の基盤となる日本人の人体計測データの構築と多角的分析」における人体計測が、次年度から本格的に始まります。長丁場の取り組みとなりますが、本部会の専門性を活かした社会的貢献ができますよう、総力を挙げて進めてまいりましょう。

平成26年度の夏期セミナーは、実行委員長を土肥麻佐子先生にお願いし「次世代につなぐ服づくりの技(仮題)」をテーマに、アルカディア市ヶ谷において8月28日(木)に開催いたします。人体計測のための時間と労力を確保したい関係上、例年より若干縮小したプログラムを予定しておりますが、内容的には多くの示唆が得られることと存じます。ふるってご参加下さいますようお願いいたします。「中学生創造ものづくりフェア」についても、引き続き支援を行う予定です。

大学を取り巻く状況は益々厳しく、いずれの大学においても学生数確保や新入生の導入教育などのための業務が増すばかりと、耳にするようになってから久しくなります。その上、被服学領域そのものも依然困難な立場にあるといえるでしょう。自身も被服関連分野の教員は全く1人だけで、専門的な教育や研究がしにくい現状に直面しております。大学それぞれの事情や教育目標、個々の立場の違いにより内容に多少の差があるとしても、多くの先生方が教育・研究に関する悩みをかかえておられることと存じます。しかしながら、人は被服なしでは生きられないばかりか、生活を快適に、心を豊かにするものであることを改めて胸に留めたいと思います。そして、被服の重要性を誰よりも強く認識し、被服構成学の教育・研究にかける熱い思いを共有できます本部会は、心の拠り所となっております。同じ思いをもつ者同士での忌憚のない意見交換や情報の共有により、お互いに前進していきたいと存じておりますので、ご支援・ご協力を重ねてお願い申し上げます。

高橋キヨ子先生を偲んで 被服構成学研究委員会での功績

十文字学園女子短期大学名誉教授 古松 弥生



長寿を全うされた高橋キヨ子先生を偲び心からご冥福をお祈り申し上げます。私が初めて先生にお目にかかったのは、昭和43年に被服構成学研究委員会の準備会が行われた席でした。昭和41・42年に日本初の日本工業技術院「既成衣料のための体格調査」を担当した全国の研究グループが事業終了後も共通の場で研究を進めたいとの思いで、お茶の水女子大学教授 柳澤澄子先生の呼びかけに応じたのでした。

その結果、被服構成学部の前身、被服構成学研究委員会が誕生したのです。この時期は学問としての被服構成学の黎明期でした。柳澤澄子先生を初代委員長とし、奈良女子大学教授水梨サワ子・東京学芸大学教授石毛フミ子・京都女子大学教授土井サチヨ・福島大学教授高橋キヨ子の諸先生が歴代委員長として被服構成学の水準を高めるために努力されました。特に昭和52、53年度委員長高橋キヨ子先生は、日本家政学会の部会として被服構成学部会が発足し、55年度祖父江茂登子部会長に引き継ぐまでの過渡期に並々ならぬご苦勞をされました。

そして、どの場面でも、先生は誰にも柔和でおだやかに接されました。しかも、物事を理路整然と、また毅然として処理されるので誰もが納得し、信頼し、たよりに致しました。私は委員会の一員として、そんな先生のお姿とお人柄に接しながら学んだことを大変有難く感謝しております。高橋キヨ子先生の後輩として、先生をお手本として尊敬し、また、誇らしく思います。被服構成学部の今日の発展を見るにつけ、その学問としての被服構成学の研究・発表の場、研修・教育の場としての部会の基礎を築かれた先生のご功績を思いおこします。

今回、この記事を書くにあたって、被服構成学委員会の当時を走馬灯のように想いめぐり、その中での先生との貴重なおつきあいを懐かしく感じました。このたび、晩年の先生の温かな中にも毅然とした変わらぬお姿のお写真を拝見しました。教職に携わる社会人として、ご家庭では良き伴侶、母として、幸せな、立派な人生を全うされたことが偲ばれました。あらためて、後輩へのお手本を示されたと感じました。

<ご略歴>

1914 東京日本橋区浜町に生まれる
1936 東京女子高等師範学校家事科卒業
1936～1944 同附属高等女学校教諭
1952～1979 福島大学教育学部講師・助教授・教授
1979～1989 福島女子短期大学教授
1999 福島大学名誉教授

<主なご業績>

- ・「女子中・高校生の衣服寸法に関する研究-1・2-」(家政学雑誌 18(4), 1967)
- ・「衣服型紙に関する研究-1- 小・中学生の身体軀幹部の年令的变化」(家政学雑誌 20(4), 1969)
- ・「衣服型紙に関する研究-2- 小・中学生の肩傾斜角を中心とした身体形態の特徴」(家政学雑誌 20(6), 1969)
- ・「衣服型紙に関する研究-3- 青年男女の肩傾斜角を中心とした身体形態の特徴」(家政学雑誌 21(7), 1970)
- ・「衣服型紙に関する研究-5- 青年男女の身体軀幹部形態について」(家政学雑誌 23(2), 1972)

1965年から3ヶ年に亘って実施された日本家政学会、日本人類学会、繊維製品消費科学会の共催による「日本人体格調査」では、専門委員として活躍された。

柳澤澄子先生を偲んで 被服構成学の生み・育ての親 そして憧れの研究者として

大妻女子大学（名誉教授） 松山 容子



柳澤澄子先生は昨9月20日、百歳を直前にして逝去されました。先生は私どもの領域、被服構成学を学問として、当時の数多い困難の中から打ち立てられ、また研究者をゼロから養成するために、大学院設置を全国に先駆けて進められました。本部会の前身、被服構成学研究委員会を日本家政学会の中に作られたのも柳澤先生ご本人なのです。また、大事業、“既製衣料の寸法基準作成のための日本人体格調査”を提唱され、前後2度にわたる全国調査の企画・実施・資料解析と結果のJIS規格化に当たられました。その恩恵は、既製服サイズシステムとなり全国民に及んでいます。これらの他、周知されるようにご業績は多大です。

お教えを受けた者たちには“研究では厳しくてもお心配り優しくしていただいた”との思いがいつまでも残ります。ご退職の後には、フェルト手芸や俳句などを楽しまれ、お作を作品集2冊、俳句集5冊にまとめられ、周りにお恵みくださいました。そこからは先生のお傍の、鎌倉の空気・草花などの清々しさ・愛らしさ、それに人々へのお慈しみが……。平成18年1月には句集“森”の中で「寒にして道真すぐに米寿卒寿」と詠まれました。先生をお偲びし、ご冥福をお祈り申し上げる次第です。

<ご略歴>

1914 長野市に生まれる
 1934 東京女子高等師範学校家事科卒業
 1934～42 長野県立高等女学校教諭，同女子専門学校教授
 1942～44 実践女子専門学校教授
 1962～79 お茶の水女子大学助手，助教授，教授
 1959 学位取得（医学博士・東京大学）
 1963～ お茶の水女子大学大学院家政学研究科前期課程設置に至る，被服学専攻担当
 1977～ 同学大学院人間文化研究科後期博士課程設置に至る。同課程担当
 1965 工業技術院委託研究「既製衣料の寸法基準および寸法統一のための日本人の体格調査」（第1回）の専門委員として企画，調査実施，資料整理，統計解析等を担当
 1968 第1回日本家政学会賞を受賞
 1978 「既製衣料寸法のための日本人体格調査（略称）」委託研究（第2回）を前回同様担当

1979 お茶の水女子大学定年退官，同学名誉教授，大妻女子大学教授
 1982 大妻女子大学大学院後期博士課程被服環境学専攻設置，同専攻担当
 1984 日本家政学会功労賞受賞，文部省産業界百年記念功績者表彰受く
 1985 叙勲 勲三等宝冠章
 その間 大学設置審議会委員，学術嘉一専門委員，日本工業標準調査会委員など

<主なご著書など>

- ・1966 「Dress Pattern の基礎と応用」共著，柴田書店
- ・1971 「被服構成学」編著 光生館
- ・1976 「被服体型学」光生館
- ・1977 「被服構成学実験」編著 産業図書
- ・1983 「被服設計のための生体学論文集」編集
- ・1989 「服装概説」－菅原教造先生遺稿集」編集，近藤出版
- ・1992 随想集「私の歩んだ道」－被服構成学の半世紀－築地書館

増田茅子先生を偲んで 楽しかった思い出と独立した研究姿勢をいただいて

三重大学 増田 智恵



神戸女子大学名誉教授の増田茅子先生のご逝去に接し、心よりお悔やみ申し上げます。

いつまでもお元気なイメージの“茅子先生”でしたので、大変驚くと共に深い悲しみで一杯でございます。同時に最後にお目にかかってすでに20年の月日が経過したことにも気づかされました。先生との楽しい思い出は、私が学部と大学院のときに被服構成学の非常勤をされており、ニューヨーク F. I. T. での Pattern Making の魅力を楽しく講義していただき、被服構成学の研究を始めるチャンスとおしゃれを楽しむ衣生活スタイルもご伝授いただいたことです。また大学院最終学年で指導教官の水梨先生が急死され、私の修士論文の特別指導教官を先生にお願いしてご負担をかけました。同時に、私を当時先生がご在職の福山の短大に就職させてくださいました。このとき、まず5年間は教育者としての勉強を優先すること、研究は独自の発想と構築した成果をひとりでまとめて紀要などで検討した後、学会誌などへの投稿をするようという非常に謙虚で確実な成果を求められるご指導で、「独り立ちができる教員と研究者になりなさい」という将来を見据えてのご助言でした。その後すぐに（1983年）広島大学へ移られ、続いて1986年～1994年まで神戸女子大学で教育と独自の被服構成学として「婦人服ベイシックドレスパターンと人体に関する研究」を先生もほぼおひとりで続けられ、1997年に神戸女子大学名誉教授とされました。その間、主に6報の家政学会誌（1973～1975）などの成果により第1回衣服研究助成賞を受賞され、1970年～1987年に3冊の衣服設計に関する著書をまとめられるなど、多くの研究と事典などを執筆されています。1987年の御本では共著者のお誘いをいただきましたが、その時印象に残ったのは“日本の女子裁縫教育を戦後の新制大学家政学部の被服構成学として確立された柳澤先生はじめ多くの先生方のご努力を鑑みると、自分の研究はまだまだ拙いので「被服構成学」というタイトルの本をまとめるのは僭越である”と言われたことでした。「被服構成学」をととても大事にされており、昭和54年～昭和56年に本部会長を務められ部会の活性化をはかられました。現在、日本学術振興会などの仕事に関わり総合的研究分野の一部としての被服研究成果を眺めると、その評価は厳しく、増田先生が柔らかかにがんばりなさい！と言われている声が聞こえます。日本の戦後の新しい衣服パターン設計を中心とした研究の入り口を開かれた先生でいらっしゃいました。

広島瀬戸内海を見渡す尾道で生まれ、戦争のなか奈良女子高等師範学校をご卒業と同時に結婚をされて、ご主人の戦争招集から復員を待たれたこと、二人のお子様を育てながらご主人のお仕事を優先して本格的に被服構成学の研究を始められたのは子育てが終わった40代半ばで、統計学やパソコンなど大学生の息子さんに習ったことなど、講義後に先生とお好み焼きを食べながらおしゃべりをしたことが思い出されます。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

<ご略歴>

1922 広島県尾道市に生まれる
1942 奈良女子高等師範学校卒業
1952～1963 岡山女子短期大学講師
1963～1983 福山市立女子短期大学
講師・助教授・教授
1967～1968 N. Y. STATE COLLEGE F. I. T. に留学
1983～1986 広島大学学校教育学部教授
1986～1994 神戸女子大学家政学部教授
1997 神戸女子大学名誉教授
昭和54年～昭和56年 日本家政学会被服構成学部会長

<主なご業績>

論文：婦人服ベイシック形ドレスにおけるゆとりに関する研究 第1報～第6報, Vol. 24～Vol. 26, 家政学会誌 (1973～1975)
賞：財団法人衣服振興会主催 第1回衣服研究助成賞, 「婦人衣服設計のためのゆとりに関する研究」(1979)
著書：「婦人服のためのパターンメイキングの基礎」(1970), 「Dress Pattern Making」(1975), 「Clothing Construction—理論と技術—」(1987), 関西衣生活, 大

平成 25 年度 被服構成学部会 総会

日時：平成 25 年 5 月 18 日（土）

会場：昭和女子大学 E 会場 3S07 教室

平成 25 年度被服構成学部会総会は、森由紀副部会長の司会により下記のとおり進行した。

総会次第

- | | |
|---------------------------|-------|
| 1. 開会の辞 | 森由紀 |
| 2. 部会長挨拶 | 鳴海多恵子 |
| 3. 議長選出 | 千葉佳子 |
| 4. 議事 | |
| (1) 平成 24 年度事業報告 | 土肥麻佐子 |
| (2) 平成 24 年度会計報告 | |
| 1.平成 24 年度収支決算報告 | 田中早苗 |
| 2.平成 24 年度夏期セミナー会計報告 | 田中早苗 |
| 3.平成 24 年度貸借対照表 | 田中早苗 |
| (3) 平成 24 年度会計監査報告 | 大村知子 |
| (4) 平成 25 年度事業計画（案） | 土肥麻佐子 |
| (5) 平成 25 年度夏期セミナーについて（案） | 森由紀 |
| (6) 平成 25 年度予算（案）について | 中村邦子 |
| 5. 議長解任 | 鳴海多恵子 |
| 6. 報告事項 | 鳴海多恵子 |
| 7. 閉会の辞 | 森由紀 |

上記の議事について審議し、承認された。

**平成 25 年度 （一社）日本家政学会 被服構成学協会
公開夏期セミナー「アパレルに生かす人体計測の取り組み」**

期日：8月29日（木）・30日（金）

場所：倉敷ファッションセンター（倉敷市児島駅前1-46）

プログラム

	8月29日（木）		8月30日（金）
12:30～	受付	9:00～	受付
13:00 ～	開会の辞	9:30～10:10	部会員報告
13:10	講演1		「人体計測特別委員会中間報告」
13:10 ～	「国際標準化戦略と ISO/TC133」		日本女子大学
14:10	アパレル工業技術研究会		大塚 美智子 氏
	知久 幹夫 氏	10:20～11:00	講演3
	講演2		「学校制服作りの現場から」
14:30 ～	「我が国の人体計測の変遷と今後」		明石被服興業株式会社
	元 実践女子大学		児島 育子 氏
15:30	高部 啓子 氏	11:10～12:10	講演4
	計測実習		「我が国のジーンズ製造の歴史」
	京都女子大学 渡邊 敬子 氏		ジーンズミュージアム
15:50 ～	懇親会	12:10～12:15	閉会の辞
17:20		12:15～13:00	昼食
18:00 ～		13:00～15:00	見学会
19:30			ジーンズミュージアム
			ベティスミス

国際標準化戦略と ISO/TC133

パリ総会報告

日本アパレル工業技術研究会 ISO/TC133 日本代表委員 知久 幹夫 氏

知久幹夫氏は、JUKI（株）「縫製能率研究所」で品質管理・生産管理の仕事に携わってこれら、退職後日本アパレル工業技術研究会 ISO/TC133 日本代表委員をされている。また、縫製に関する豊富な知識とカメラに優れた技術をお持ちで、文化ファッション大学院大学など複数の大学で講師をされ、「JUKI Magazine」「ミニ情報」（日本衣料管理協会発行）の編集にもかかわっていらっしゃる。今回、ISO/TC133 の概要、国際標準化戦略の重要性、2013年5月に開催されたパリ総会における各国の提案内容とその影響についてご講演いただいた。

ISO（International Organization for Standardization：国際標準化機構）は国際的な標準をつくる組織で、略称はギリシア語のイソス（isos）に由来している。1947年に設立され、電子・電気関係以外の標準化を進めている。この組織の技術委員会として TC（Technical committee）があり、繊維関係は TC38、衣服関係は TC133 で検討されている。日本における ISO の対応機関は日本工業標準調査会（JISC）であるが、この組織のなかに団体がいくつかあり、衣服については日本アパレル工業技術研究会が担当している。WTO（世界貿易機関）の加盟国は、「貿易の技術的障壁に関する協定（TBT 協定）」に順守する義務を負っているため、国内規格である JIS は国際規格の ISO に整合化させることが求められる。最近では、技術開発と標準化が課題であり、一つの戦略になっている。新しい技術や製品に関して自国に不利な規格が決まると、技術がいくら優れていても競争に勝っていくことは厳しい。現在、アパレルに関する問題としてサイズが俎上に載っているということである。

TC133 の名称は、「衣料品のサイズシステムと表示及び計測方法の技術委員会」である。ISO での国際規格化などの決定は、P メンバー（20カ国のうちアジア4カ国、ヨーロッパ14カ国、アフリカ2カ国）の投票による。ヨーロッパには CEN（Comité Européen de Normalisation：欧州標準化委員会）があり、その影響力は大きい。TC133 の活動は、1990年以降休止状態で2010年に中国で再開されたが、20年間に環境の変化は大きく、ビジネス環境として生産地域と販売地域が異なること、通信販売やネット販売が増加しているが返品が問題になっていることなどがあり、今後 TC133 の進め方として衣服生産とフィッティングの質を高めコストを低減し、サイズ表示の標準化と異なるサイズ表示方法を調整すること、それから世界の衣服サイズのデータセンターを目指すことを目標にしている。

パリ総会では、既に WG が成立している中国、韓国、フランス、南アフリカからの提案が承認され、技術委員会原案（CD）作成の段階に進み、2年以内に規格化することが求められている。中国提案は ISO8559 の見直しで、自国の規格である GB1335 での成果をもとに計測項目などを決めたいとしている。韓国は、産官学の共同研究で i-fashion 進めており、バーチャルヒューマンボディとバーチャルゲームにより可能になるデジタルフィッティングの規格化を提案している。フランス提案は主要身体計測部位のアイテム別設定、南アフリカ提案は製品計測方法の規格化と新規にパンストの計測方法である。それぞれ日本の産業界への影響が懸念される。

日本のアパレル産業は、国内市場が伸び悩む中で販売のグローバル化が求められている。規格ができてから対応するのではなく、検討の段階から日本の不利にならないように積極的に関与していくべきであると強調された。アパレル産業における標準化の重要性と現状について理解を深めることができ、大変参考になった。グローバルな視点からの研究教育の必要性を改めて感じた。

（記録 服部由美子）

我が国の人体計測の変遷と今後

元実践女子大学 高部 啓子 氏

ご紹介の通り、日本の全国体格調査の情報満載のご講演であった。セミナー要旨集は日本の被服構成学での人体計測の教科書にもなりそうな内容がまとめてあり、高部先生らしいわかりやすく且つこれまでのご経験があふれるようなご説明であった。

ご講演内容は、1. 既製服衣料のための人体計測として、(1) 体格調査の必要性、(2) 世界の体格調査、(3) 日本における体格調査ではとくに1) 衣料・生活財のための体格調査の第1回～第3回と2) その他の人体計測が、お茶の水大学名誉教授でいらっしゃる柳澤澄子先生の助手として第1回の体格調査に参加された体験談も含んで、いろいろなご苦労と工夫などについて詳細に案内されました。また(2) 世界の体格調査については柳澤先生の作成されたものに高部先生が追記した表を提示していただき、貴重な体格調査情報をいただいたと大変感謝しつつ記録をしておりました。

次の2. 人体計測の今後では、長年の間国際家政学会(IFHE)に参加されたご経験からの実態も踏まえ、今後の三次元計測機器使用による人体形態把握での問題も提示しつつ、日本での衣服設計での人体形態の基本的把握の共通認識と理解の必要性と教育研究の有効性を提案されたように感じました。被服教育が削減しつつあるなか、衣料サイズなどの説明が計測方法と一緒に正確に説明できる人材も少なくなっていることを懸念されているのではと感じました。

最後の3. 人体計測の実際についても時間が足りなくなるほどの内容でした。(1) 人体計測のスタンダードとして日本ではJIS法と人間生活工学研究センターのHQL方式、海外では国際標準化機構(ISO)の中のテクニカルコミッテーター(TC)でのTC133(日本のJIS規格での対応国際規格と引用規格の人体計測関係ISO-3635とISO-8559で現在改訂のための検討中)とTC159(ISO-7250とISO-15535が計測方法等関係)が人体計測に関わっていること、2010年からTC133は毎年会議を開催しTC159の人間工学との連携を保って行くことなど、国際的な人体計測に関する動きが紹介されました。さらに実際の人体計測に役に立つ情報として(2) 人体計測の基準点・基準線、(3) 人体計測器、(4) 人体計測項目、(5) 人体計測での基本姿勢、基準点、基準線、計測項目と計測部位が、図表を提示しながら説明され、要旨では身体計測記録表も入れて実際に計測資料として利用できるようにまとめてありました。後述の引用文献も含めて「体型学」の講義を聞かせていただいた学生の気分になりました。

私事ですが平成4年から実際に三次元直接・非接触人体計測器4台を使い、下着や基準点・基準線などを含めて直接計測と大差のない安定した3Ddataを得るためには約300名のモデルでの練習やデータの検討期間が3年程度必要でした。本講演での人体計測データ抽出のご苦労が納得できると共に、今後の我が国の人体計測が三次元計測も含めて国際的にも通用するものとして成立するように期待したい。なおセミナーにご都合でご参加できなかった皆様には、要旨集を求めてぜひご一読いただければと思います。(記録 増田智恵)

計測実習

京都女子大学 渡邊 敬子 氏

先の講演で高部先生がマルチン式計測器の使い方、計測項目（高径、幅径、長径、周径）、皮下脂肪、肩角度、体重について説明をされ、その後、計測実習を大村・松山両先生に師事された渡邊氏のデモンストレーションに沿って行った。モデルは学生5名で、約50名の参加者が4グループに分かれ実習した。お話を聞くだけでなく、他の参加者との交流が図れて概ね好評であった。以下、計測方法について渡邊氏の説明の概略を記す。

まず、眼窩点を確認し、耳眼水平位の姿勢をとる。頸窩点（鎖骨上端の中点）に印をつけ、ネックチェーンを前に交差し、頸窩点をおさえ横線を引き、僧帽筋の前側に縦線をつけ頸側点とする。メジャーのゴムを右手首にはめ、補助者が頸椎点を親指で、人差し指で頸側点をおさえ、メジャーを立て前で数値を読む。数値は3ケタで、ミリ単位。肩の角張った骨を探し、一番広い位置を肩峰点とする。丸ゴムの腕に通し、上腕骨の1/2を通るように、後ろから腕付け根線を丸ゴムに沿って肩先点や背幅、胸幅の基準になるようにラインを引く。右腋下に水平に物差しをはさみ、前後の幅の1/2を直上するよう印をつける。後ろ腋点から肩先までの1/2の点を背幅の基準とする。身長計を使い他の3か所に映す。背肩幅は背中の中の中心線と直交するように左右肩先点間を測る。背幅、胸幅を続けて測る。肘を曲げて出っ張るところを確認して手首の出っ張ったところの真ん中に×印をつけ、左手で肩先、右手で肘点をおさえ袖丈を測る。下半身にシールをはっていく。腸骨棘点：下から指先を使って押し上げて出っ張っているところの下側。転子外側点：尻を締めてへこんだところの前あたり。分かりにくい場合は、足を前に出しかかとをつけてつま先を振って動くところに左右に印をつける。脛骨点：足を曲げてもらい下から押しあげて溝をとらえたら戻して印をつける。ウエスト：ウエストベルトが落ち着くところ、今は細くてもウエストのくびれがない人や高い場合がある。JIS定義では正しいが、議論の余地あり。HQL計測では肋骨と腸骨の高い位置の1/2となっている。背丈：補助版を使用し、肩甲骨の高さを含んでウエストベルトの真ん中の位置まで測る。バスト：BPにシールを貼り、普通はブラジャーをしないのが基本。計測者は正面で左右側面を確認しながら測る。アンダーバスト：バストの直下で水平に測る。腹囲：おなかの一番出っ張っているところで水平に測る。ヒップ：腸骨あたりで補助版をモデルに持ってもらい転子外側点の位置で測る。大腿最大囲：水平でなく、足にぴったりはまるように測る（一番上ではない）。ウエスト：マジックテープを左側にし、メジャーをウエストベルトの上にあてウエストベルトをはずして素早く測る。その後、モデルを交代しもう一人別のモデルを測った。

実習後、高部先生より計測器の扱い方について詳細な補足説明があった。身長を測るときは、横木は15cm位とし、身長差があるときは台の上ののって測り、目盛りを読むときは倒して読む。杆状計はネジをしっかり止め、先端の長さを合わせ、向き合わせに横木を入れる。目盛のスタート地点がずれているが、厚みを含んで目盛が打ってあるので注意。肩峰幅を測るときは、7cm内外で指先をそえて強く当たらないようにする。矢状径を測るときは最大限長くし、下から入れてあげ被験者を傷つけないようにする。頭身指数のもとになる全頭高を測るときは、上下の横木の長さを違えて測る。前腋点と後ろ腋点、腕付け根点の定義は難しく、AH上とするかどうか。後ろ腕付け根点は定規をあてた位置、後ろ腋点はしわの位置で、ほんのわずかに差があること、前腕付け根点は分かりにくいなど、今後、議論の余地があることも説明があった。以上、科研費の人体計測実施に向けて、さらに検討の必要性や、練習を重ねることの重要性を確認でき、非常に充実した内容であった。

(記録 中村邦子)

部会員報告 「人体計測特別委員会中間報告」

平成 25 年度, 26 年度以降の計測実施計画

日本女子大学・大塚美智子 氏



被服構成学部会の運営委員を中心に立ち上げた人体計測プロジェクトが平成 25 年～29 年科研費に採択され、約 20 年ぶりに全国規模の人体計測をスタートさせる。プロジェクトの推進リーダーであり、研究代表者を担って下さった大塚氏より、計測実施に至る経緯と研究計画の詳細をご報告頂いた。

日本人の人体計測調査は、2004 年～2006 年に HQL によって手計測と三次元計測が行われたが、データの扱いや過去の計測項目と整合しない項目があるなど、問題点を包含していた。この度のプロジェクトは、JIS 衣料サイズの設定やアパレル設計で幅広く活用されてきた手計測の計測技術と知識

の継承を図ることにも主眼を置く一方、世界的に主流となりつつある三次元計測データとの互換性の検証も視野に入れ、アパレル設計に対応した精度の高い人体計測データベースの構築とグローバル化するアパレルで国際競争力を確実なものにすることを研究目的としている。

平成 25 年度計画では、計測基準点の定義、計測項目、計測方法、計測着衣、三次元姿勢の計測条件等を検討事項とし、9 月以降に問題点を洗い出し、各大学の受け入れ確認、データの扱いやまとめ方を確認し、2014 年の 3 月から 4 月にかけて計測練習と基準点の統一を行なう。平成 26 年度は、5 月から 10 月にかけて大学生と高齢者の計測を関東、中部、関西で実施し、平成 27 年度以降は中国、九州も含めた 5 地域で実施する。研究メンバーは、被服構成学部会に所属する多くの研究者に協力を呼びかけておられるので、ご参加下さる方は是非運営委員にご連絡いただきたい。

報告の終りに、セミナー数日前に帰国されたばかりでいらした中国・長春市での 4 日間に渡る計測実践例をお話し下さった。計測の流れや被験者への配慮を理解する上でたいへん参考になりましたことを特記する。

(記録 田中早苗)



平成25年度 夏期セミナー計測実習風景

講演3 「学校制服作りの現場から」

明石被服興業株式会社 児島 育子 氏

講師の児島氏は、服作りを学びたくて倉敷市立短期大学服飾美術科に入学され、2年間を過ごされた。洋服＝ファッションと当時は思っておられたそうである。また、大学で学ぶいろいろな実験がなぜ必要なのかが分かっていなかったが、卒業し、明石被服興業株式会社に入社し、学校制服の企画に従事されてから、はじめてその重要性が分かったそうだ。専門的に勉強したことは、必ずどこかで活かせるため、入社した新人が職場に合わないとなっても、何を学んできたかを確認しそれに合った部署に移せばいいといわれる。若い子達の芽をつぶさないよう、自分の作った制服を着ている生徒を見るとうれしく感じる達成感を若い人に伝えたいと言われ、そういった考え方は、教育現場でも参考にさせていただきたいと思った。

さらに、現場では1日に上げる枚数を重視しているため、短大の時に学んだような手作業はないので、最初は現場と大学とのギャップを感じられたが、基本を知っていて初めて分かることが多いため、基本が重要であることがわかったとお話された。

次に、制服の歴史について、現代の制服について、制服が出来るまでなどの説明があった。児島地域で有名なものは、「塩」・「いかなご」・「綿」の3白と言われるものである。塩田が多かったこの土地では米よりも綿作りが適しており、刀の紐として使われた綿で織られた「さなだ紐」や綿の厚手の縦じま織物「おぐら織」などがまず発展した。その後、入れ替わりに足袋が製造されるようになり、大正5年頃は1000万足を製造していた。しかしそれが衰退して、雲斎織り（学生服の表地）や染色が盛んで、ミシンが整備され、販路があったなどの理由から、学生服の製造へと移り、現在に至っているそうである。

20年前の制服は、男子では画一的で量産型であり、いろいろなデザインは必要なかった。昭和19年くらいには児島で生産される制服の9割は詰襟であったが、現在では、約7割に減っている。女子では、それぞれに地元で学校前にある制服メーカーが作っていたが、徐々に衰退している。現在の状況は、制服メーカー数社が、学校からの依頼を受け、今の生徒に合うように少しずつ変更しているマイナーチェンジを行うか、メジャーチェンジを行う場合は、プレゼンテーションがあり依頼を受けデザインを詰めていくそうである。パターンについては、生徒の体に合うように立体裁断などを行い、会社独自の軽くて着用しやすいもの作りを目指しているそうである。制服の採寸では、ゲージと呼ばれる寸法ごとのサンプル品20サイズの中から着せ付けて行われ、前年度の実績を参考にサンプルが作られていくようだ。素材については、毎日着て3年間持つように耐久性を考えており、制服がやや高価な理由の一つとなっている。20年前はウール100%で上下同色が主流であったが、10年前から機能性や管理・洗濯面などを中心に考えていく傾向となり、ウール70%の自宅で洗えるものに変化している。

制服の着こなしは、全国的に指導に悩まれている学校が多らしく、明石被服興業株式会社では、早くから生徒に対し制服の意義や着こなしのマナーなどの講演をされている。衣服は、情報を発信していることや、衣装と制服の違い、TPOやオンオフなどの基本的なマナーについて話されている。学校制服は、今はファッションアイテムの1つにもなっており、今後、どうファッションを取り入れて行くかが課題であると、児島氏は話された。

我々が制服を製造しているメーカーの現場の声をうかがえる機会は少ないので、今回のセミナーにおいて、制服に関する多くのことをうかがうことが出来て有意義であった。 (記録 原田妙子)

我が国のジーンズ製造の歴史

ジーンズミュージアム名誉館長 柏野 静夫 氏

ジーンズの製造に長年尽力してこられた、ジーンズミュージアム名誉館長柏野静夫氏より我が国のジーンズ製造の歴史について貴重なお話を伺った。被服構成学部会員小山京子先生との対談およびフロアとの質疑応答によりお聞きしたお話しの概要は以下のようである。

1. 児島でのジーンズ製造の歴史

1850年代のアメリカのゴールドラッシュの時、幌からパンツを作ったのがジーンズの始まりである。リベットでポケットの補強をするなどの工夫がなされ現在の形になった。日本では、昭和39年の東京オリンピックの時、海外の選手の70%近くが私服として着用していたことから、ジーンズが注目されるようになった。岡山県の児島は、戦時下軍服を製造するため厚物縫製の産地となった。その後学生服を生産していたが、東京オリンピック後の昭和40年以降、ジーンズの将来性に着目して厚物であるジーンズの製造を始めた。御徒町や横須賀などで販売されていた米兵が着用していたジーンズの中古品を入手する、直接アメリカに視察に行くなどの経緯を経て製造が始まった。

2. ジーンズ製造のための試行錯誤

昭和47年まで、衣料品は管理貿易により綿の輸入ができなかったため、アメリカから原反を輸入して裁断、縫製を行った。ジーンズの生地は従来生産していた生地の3倍近くあり、ミシンの針板の穴を変え、地下足袋用の針を使用するなど、これまでの技術を駆使して縫製した。その後、専用の工業用ミシンが開発された。縫い糸も日本では厚物の縫製に30番のカタン糸を使用していたが、ジーンズでは部位により糸の太さが異なることがわかった。そのため東洋紡と交渉して6番・7番の太いカタン糸を生産したが、大量買い取りのためのリスクも抱えた。また、日本人用のパターン設計にも苦心した。昭和47年以降自由貿易となり、商社と連携してアメリカで上質の綿を生産し、国内でローブ染色の技術もでき、日本でデニム生地が生産されるようになった。

3. 国内ジーンズの特徴である「洗い加工」について

昭和62年頃に、デニムは収縮が激しいので、新品を洗って販売することを始めた。児島にも、ジーパンを洗濯する新しい業種ができ、一時は30社くらいあった。今でもジーンズは洗わないと売れない。日本の半年後くらいにイタリアでもジーンズを洗い始めたという話を聞いている。

昭和60年代ジーンズの品格をあげるため、デパートで販売したいと考え営業を行った。当初は洗濯したものをデパートで販売することはできなりと拒否されたが、西武デパートでようやく商品を置く事ができた。その後、売れる事がわかり各デパートで一斉に販売されるようになった。当時売り上げが2億円から154億円へと大幅に伸びた。

4. 今後の日本企業への提言

ジーンズは、1本あれば世界中どこにでも出かける事ができる世界共通の衣料である。このため1ヶ月の給料で50本くらい購入できるプライスを設定したい。アメリカの企業経営者はこのような思想を実現しようとしているが、日本の経営者は儲かることを重視するため、結果的に競争力がない。今後世界で通用するメーカーになるためには、このような理念をもった経営が必要であり、成功に繋がると考えている。（記録 土肥麻佐子）

見学会：ベティスミスジーンズミュージアム

日本のジーンズの聖地として知られている倉敷市・児島は、江戸時代の綿作りから、明治以降現代に至るまで、真田ひも、足袋、学生服と時代とともに主製品を変えながら繊維産業を発展させてきた。そのような背景のもと、1960年代、国内生産ジーンズ第一号がこの地で誕生した。日本初となるレディースジーンズのブランドとして、1970年にベティスミスが創立され、2003年には業界初のオーダージーンズを始め、国内のみならず海外でも展開し現在も高い評価を受けている。

ジーンズミュージアムでは、繊維の町児島、ジーンズとベティスミスの歴史、ジーンズの製造工程を紹介するとともに、オーダージーンズの注文受付を行っている。ここでは、採寸、モデルパターンからオプションのデザインを決定、生地やオプション（ボタン、レザーパッチ、ステッチ糸等）の選択を行い、スタッフとの綿密な打合せのもと、すべて工房内で職人の手作業によって作られる。

デニムワークショップでは、ジーンズ作りが体験できる。米国製の巻き縫いミシンでジーンズの裾縫いを行ったり、旧式のリペット打ち機を実際に使ったりすることもできる。アウトレットショップでは、アイデア満載のオリジナル商品を見学できた。

ジーンズに込められた人の思いと、ものづくりの歴史に触れることができた。（記録 鈴木 明子）



ジーンズミュージアム風景

夏期セミナーに参加して

日本女子大学大学院家政学研究科被服学専攻
森田 晴香

2013年8月29日・30日に開催された夏期セミナーに参加致しました。今年度は「アパレルに生かす人体計測の取り組み」というテーマで先生方がご講演を下さり、ISOの国際会議のお話や人体計測の変遷、今後の課題や取り組みについて学ぶ事が出来ました。

知久先生の国際会議に関するご講演の中では、日本の高い技術を標準化したいが、自由化しすぎると技術の流出になるとおっしゃっていた事が印象に残っています。国際会議で一つの物事を決める事の難しさを実感しました。高部先生のご講演では、人体計測の変遷や今後に関する貴重なお話を伺い、人体計測の基本となる人体の構造や動きの理解の重要性を再確認する事ができました。渡邊先生にご指導頂いた計測実習では、計測点の見つけ方のポイントや定め方に関する知識を深める事ができました。大塚先生の人体計測プロジェクトに関するご講演を拝聴し、質の高いデータベース構築のためにも、肩峰点やウエスト基点、膝関節点など、曖昧となっている計測点をどのように定めるのか、深く検討する事が重要であると学びました。

夏期セミナーの開催地である倉敷市児島は繊維産業が盛んな地域ということで、学校制服やジーンズ製造に関するご講演も拝聴させて頂きました。児島さんのご講演より、学校制服の素材・縫製の耐久性の高さを知り、衣服設計において学校制服から学ぶ事のできる点がある事を実感しました。また柏野さんが、日本にジーンズや新しい概念を普及させるために様々なご苦労をされたにも関わらず、そのご苦労を生き生きとお話されている姿がとても印象に残りました。

今回、初めて夏期セミナーに参加させて頂きましたが、様々な事を学び、考える、とても充実した2日間を過ごす事ができました。セミナーで学んだ事を生かし、今後の研究に励みたいと思います。

平成25年度研究例会

和装の文化

大妻女子大学 阿部 栄子

きものは、日本固有の衣服であり、長い間日本人の実用着として活用された歴史をもち、優れた民族衣装として国際的にも高く評価されている。その中には日本人ならではの文化が随所に凝縮されている。この美しい生活文化を、より良いものとして次世代へと着実に伝承していく役目が私たち日本人にはあるのではないのでしょうか。

きものは着物であり、着るものを意味することから考えれば全ての衣服をさすことになるが、キモノと表記すれば国際語として和服の代名詞ともなり、独り歩きを始めている。

現代の小袖形式のきものは、装束の大袖形式に対して袖口が小さく、袖口下を縫いふさいだものをさすが、室町時代に貴族服飾の下着に用いられた白小袖の表着化、簡略化と庶民小袖の上級化がおこり一元化され、確立したものである。室町末から桃山、江戸初期の小袖は初期小袖と呼ばれ、袖幅が狭く、身幅が広く、衿下が短く、袖口、おくみ下がり、衿肩あきが小さく、対たけ（ついたけ；足首までの長さ）である。寛文の頃、反物寸法の改定により袖幅が広く、身幅が狭くなり、身たけの長い分を外出時には褌を取ったり（掻取）、身ごろをたくしあげて抱え帯で結ぶなどしたことが、おはしよりの発生となり、現在へと伝承されている。

表着としての小袖は、絞り、刺繍、箔押し、描絵、友禅など日本人の繊細で卓越した職人の心と技が生かされており、誇るべき染織技法が加えられて美しい模様の小袖が発達し、日本人の自然観に根ざした美意識の中で育てられ発展した。日本独自の自然を慈しむ生活様式の中で培われた日本人の優れた感性は、「詫び寂び」「粋と雅」「花鳥風月」などの言葉に代表される独特の美意識を生み出し、まさに、きもののデザインにはその美意識が表現されている。

きものは、直線的な平面構成で、形がほぼ定形であるため、布地の素材、染織意匠、デザインの美しさが魅力の大きな要因となり、庶民感覚にはなかった晴れ着と褌着の区別がされてきた。晴れ着は公式の場に着るきものであり、若い人の振り袖や留袖に代表される。褌着は普段着の意で、改まった場合ではない日常着のことである。「ケにもハレにもただ一つ」という庶民感覚にはこのような習慣はなかったことである。

学校教育における着装の実践授業は、きもの一枚で染め・織り・文様・家紋・ドレスコード・季節感など、日本人であれば学んでおきたい知識と美意識を同時に学ぶことができる。更に、洋装と和装の際の立ち居振る舞いなど、動作の違いを実感しながら学ぶことができ、礼と美を兼ね備えた有益な着装実践学習であると考えている。また、最近の若者の間には手軽な夏期のゆかたが支持されており、これも嬉しい現象と捉えている。

家庭科への発信

きもの文化の伝承と発信のための授業実践の試み

埼玉大学 川端 博子

現代社会における急速な技術の進歩や国際化・情報化の進展は、長い歴史の中で培われてきた生活技術の伝承の機会を減らし、自国の伝統文化への興味・関心を減退させてきた。日本のきもの文化においても、染織、縫製、着装に関わる技術に支えられてきたが、日常着が洋装化し既製服が普及した今日、これらの技術や文化が若者に伝承されなくなっている。このような背景のもと、2006年に教育基本法が改正され、「伝統や文化を尊重しわが国と郷土を愛するとともに、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」が新たな教育の目標として規定された。これを受けて学校教育では、自国の文化への理解を深め異文化と共生できる資質や能力を育成することが求められている。中学・高校の家庭科衣生活分野においても、和服の基本的な着装や衣生活文化に関心をもたせることが盛り込まれている。

こうした状況をふまえ、本プロジェクト⁽¹⁾では、日本の「きもの」文化を次世代に伝承する家庭科の教育プログラムの開発を行い、中学校・高等学校の生徒がゆかたの着装方法を学び、「きもの」文化に対する理解を深める体験型の授業を実践してきた。

授業に前後して、ゆかたの着装およびたたみ方のDVD制作(日本語・中国語・英語版)とインターネットによるe-learningによる教育環境の整備⁽²⁾、「ゆかたがわかる」の編集、ゆかたと小物の準備を行ってきた。これらの教材を利用しながら、7校の中学・高校の協力を得て各校の実態にあわせた教育プログラムを提案して授業の効果を検証するとともに、免許状更新講習や認定講習の機会をとらえて教師対象に、本プログラムを紹介している。

今回は、2011年5～6月埼玉大学教育学部附属中学校2年生171人対象とする「文化の伝承を手がかりとする衣生活学習への試み」⁽³⁾を取り上げて紹介する。男女共学校である、50分授業など学校の実態に応じた教育プログラムを検討した。ゆかたの着装を通してきもの良さとともに正しい着付けについて知ることは文化伝承の上で必要と考え、着装後の技能評価を組み込んで着付けの出来ばえについて理解を促すようにした。用意できるゆかたや教師の負担軽減に配慮してグループ学習とし、好みのゆかたと帯を選びコーディネートさせて着る楽しさを高め、被服の印象効果を考えさせる試みを取り入れた。

授業前後での生徒の興味関心の変化、モデルとなった生徒の気持ち、着付けの技能評価、毎時間の体験後に分かったこと・感じたことの記述内容より、きもの文化を伝える授業の効果を考察したので報告する。

一連の活動を通し、「着ることは人に喜びを与える」と改めて実感するとともに、着装を軸とする学習は有効であると考えている。現在、「きもの」に焦点を当てた教育プログラムを検討している。

きもの文化の伝承と国内外への発信—グローバルな視点からの発信

海外でのゆかたの着装を含む授業実践とその効果

横浜国立大学 薩本 弥生

1. 目的：情報社会の進展により日本に関する多くの情報がテレビやインターネットなど様々な手段で世界に発信され、文化交流が進んでいる。また、政府の施策の元、全国規模で外国人観光客が増加傾向にあり、情報のみならず、人やモノの移動を含むグローバル化が進んでいる。外国人の日本文化への関心は高く、日本の文化を世界に発信する機会が増え、文化の相互交流はさらに進むと考えられる。しかし、日本の伝統文化をどのように伝えていくか、その方法についての検討はこれからといえる。特に日本の伝統文化であるきもの文化を海外に発信していこうとする学校現場での教育的取り組みは現時点では、あまり見られない。そこで著者らは2009年度（平成21年度）より毎年プロジェクト研究^{2),3)}の一環として、グローバル化に対応し、海外での学校および日本での外国人学生を対象にしたゆかたの着装を含む体験的授業実践を通して日本理解と文化交流の促進に貢献していくことを目指して教育プログラムの開発と授業実践および海外発信をすることを目的としてイギリス、中国、アメリカにおいて、ゆかたを着装するワークショップ（以下WSと略）を実施し、その成果についての分析を進めてきた^{4),5)}。本報告では、参加者が多く内容が充実していた2012年度に実施したUSAのサンフランシスコにある中学校、高校、大学および日本の横浜国立大学在籍の留学生を対象にゆかた着WSの内容および同時に実施した調査の分析結果⁶⁾を中心に報告し、WSがきもの文化の発信におよぼす効果を検証することを目的とする。

2. 方法：調査期間および対象を以下に示す。アンケート有効回答数を表1に示す。

WS内容は①事前アンケート実施、②きもの文化の紹介、③ゆかた着つけ示範の演示（図1）、④ゆかたの着装体験、⑤事後アンケート実施から構成される。

事前調査で日本の現代文化と伝統文化についての認知度と各々の情報源、きものについて知りたいことについて調査し、事後調査ではゆかたを着た際の「着装感」や「興味・意欲」、「理解・習得」などに関する19項目を5件法で調査した。

調査期間：2012年8月7日（横浜国立大学在学の留学生向けWS）

2012年9月22日～29日（サンフランシスコでのWS）

3. 結果および考察

3.1. 事前調査の結果および考察：事前調査の結果から現代文化では海外の生徒もマンガやアニメなどを知っている割合が高く、情報源ではインターネットが最も高く自ら意欲的に調べる生徒が多いことが示唆されたが、伝統文化では日本で暮らす留学生の方が、知識が広がった（図2）。また、伝統文化の情報源としては「TV」と並んで「学校」と答える人が多く、伝統文化の伝承に関する学校の役割の大きさが示唆された（図3）。

表1 対象者のアンケート有効回答数

	男性	女性	合計
留学生	5	15	20
大学生	2	50	54
高校生	22	24	46
中学生	24	25	49



図1 着つけ示範の様子

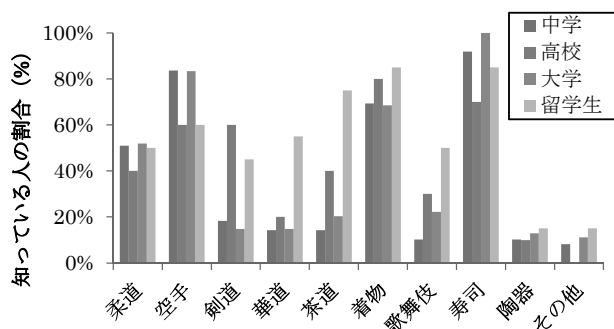


図2 日本の伝統文化の認知度

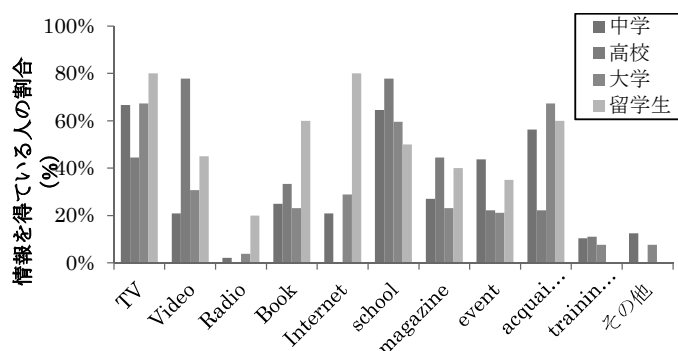


図3 伝統文化情報源

3.2. 事後調査の結果および考察：ゆかたを着てみての「着装感」や「興味・意欲」、「理解・習得」などに関する調査結果を因子分析し、その結果をもとにパス解析を行った。因子分析を行い因子を抽出したところ、各々の学校で少しずつ異なる因子が抽出された。それらの因子を元にパス解析を行った結果を各々大学（図4）、高校（図5）、中学校（図6）に示す。2011年度に著者らが日本の中学校で行った実践⁶⁾では理解習得意識および高揚感が興味・関心に影響しているという結果が得られたが、今回、理解（習得）因子からのパスは各

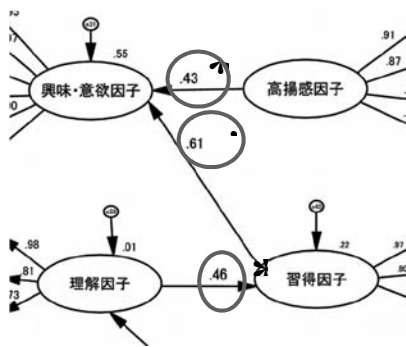


図4. 大学因子相関パス図

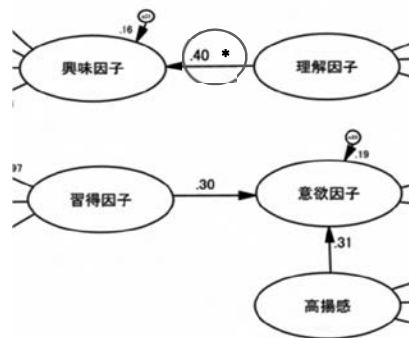


図5. 高校因子相関パス図

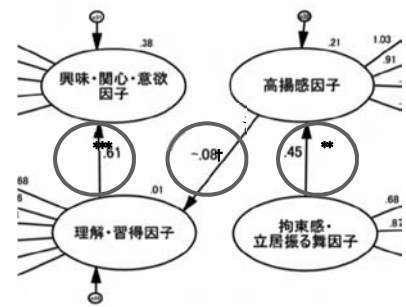


図6. 中学因子相関パス図

校で有意であったが、高揚感から興味関心への直接のパスが有意だったのは大学のみであった。どの学校でもゆかたを着て嬉しそうな生徒たちの笑顔が印象的で、実際に高揚感に関する項目はどの校種でも高かったが、それが興味関心に結びつかなかったのが、現段階での海外で行う実践の限界を示している。

しかし、参加者が全員希望者で WS の雰囲気も盛り上がっていた日本への留学生とサンフランシスコの高校生の WS では、高揚感が他の 2 校に比べ高く、それに伴い意欲も高かった。また、この 2 校は比較的時間に余裕があり、留学生の WS では着つけ後にゆかたで学内を散策する時間を設け、高校ではお茶を立てて何人かが飲んでみるという時間を設けた。この結果から、WS に対するモチベーションの違いと、着装後の活動が、高揚感やその後の学習意欲にも影響することがわかった。さらに、日本の伝統文化について認知度が高い人と低い人で比較するために、4 校合同で「伝統文化認知度」を定め 5 個以上知っている人を高値群、それ以下を低値群として分類したところ、高値群の意欲項目の方が高くなることが分かった。

4. まとめ：海外に発信する教育プログラムを実践し、きもの特徴を学び、良さを伝え、日本文化への興味関心を喚起するような学習効果が得られるかアンケート調査により検証することにより、教育プログラムのさらなる改善をおこなった。海外および日本滞在中の生徒・学生に向けたゆかたの着装を含む体験的 WS 実践やアンケート調査の結果を通して日本理解と文化交流の促進に貢献することが期待されることが明らかとなった。

また、WS を担当し、卒論としてまとめた学生自身が海外の人々にきもの文化を紹介する中で、きもの文化に対して誇りと愛着をもつようになったと述べており⁷⁾、日本での中学、高校でのゆかたの着装を体験する授業に、自分たちが学ぶだけでなく、誰かに教えるという課題を設定する方法の有効性が示唆された。今後、異文化交流等での発信を目指した授業実践も検討したい。

今後、2013 年度に実施したポータランドにある中学校（一部小学生含）から高校までの各校種の日本語クラスに所属する生徒を対象にした実践に関してもアンケートの分析結果を報告予定である。

[引用文献]

- (1) 観光庁 訪日外国人旅行者数および日本人海外旅行者数の推移 http://www.mlit.go.jp/kankocho/siryoutoukei/in_out.html
- (2) 「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発－「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信－，薩本弥生，川端博子，堀内かおる，扇澤美千子，斉藤秀子，呑山委佐子，服飾文化共同研究最終報告書，5月（2012），（平成 21-23 年度文部科学省「人文学および社会科学における共同研究拠点の整備の推進授業」の委託を受け「服飾文化共同研究拠点」として文化女子大学（現文化学園大学）文化ファッション研究機構により採択された服飾文化共同研究）
- (3) 「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発－「きもの」の着装を含む国内・海外での授業実践－，川端博子，薩本弥生（平成 25 年度－），東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科「研究プロジェクト」，((2)のプロジェクトの成果を踏まえ川端博子（埼玉大学）を研究代表者とし，薩本弥生，扇澤美千子，斉藤秀子，阿部栄子が参与し活動を継続）。
- (4) 海外でのゆかたの着装を含む授業実践とその効果，薩本弥生，井野真友美，川端博子，斉藤秀子，日本家庭科教育学会第 56 回年次大会口頭発表，6 月（2013）
- (5) 着物文化の海外発信をめざしたゆかたの着装ワークショップ，薩本弥生，川端博子，斉藤秀子，横浜国立大学家政教育学会年次大会口頭発表，8 月（2013）
- (6) きもの文化の伝承をめざしたゆかたの着装を含む教育プログラム開発のための中学校技術・家庭科での授業実践-教育学部の大学生アシスタントティーチャー（AT）を活用した試みから，薩本弥生，川端博子，堀内かおる，扇澤美千子，斉藤秀子，呑山委佐子，教育デザイン研究 4 巻，35-44(2013)
- (7) きもの文化の海外発信をめざした浴衣の着装を含む授業実践とその効果の解析，井野真友美，横浜国立大学教育人間科学部家庭科専攻卒論（2012）

特集

被服構成学とともに歩んだ日々を振り返る

被服構成学のますますの発展を祈念して

元実践女子大学 高部 啓子

はじめに 東京オリンピックが開催されていた頃、私は大学最終学年を故柳澤澄子先生の研究室で卒論に取り組んでいた。その頃、国の予算が通り体格調査を実施することになり、体格調査専任の助手が配置されることになった。その助手のお誘いを受けたことが今日までの私の原点である。それから約半世紀、被服構成学と関わって多くの先生方や関係者の皆様にご指導ご支援いただきながら無事定年を迎えられた。この場をお借りして心から感謝し御礼申し上げたい。幸いにも日本で初めての既製衣料のための日本人の体格調査や被服構成学部の前身である被服構成学研究委員会に、発足当初から関わらせていただき経過を共に歩んできた。その経験をお伝えすることは私の務めではないかと思ひ筆を執らせていただいた。

日本で初めての「既製衣料等の寸法基準および呼び寸法統一のための日本人体格調査」

通産省工業技術院は消費者行政の一環として、既製衣料サイズの統一をはかるため、昭和40,41,42年度の3カ年にわたり調査研究を進めることになった。この企画の背景には、衣料サイズの不備・不統一に対する消費者側の不満、衣料サイズの科学性に乏しいことに対する生産者・販売者側の反省があった。それが既製衣料の発達とともに急速に高まっていたのである。

この調査は国の委託事業として初年度は日本繊維意匠センターが、次年度以降は日本繊維協議会が受託した。調査を実効あるものにするために、官界、学会、業界、消費者等諸領域の専門家によって体格調査専門委員会が組織され、さらに専門的な立場から小委員会が設けられた。専門委員の恩師のもとで、私は調査項目の選定、調査班の編成、計測者の教育、調査対象の把握など一連の実施計画および調査に関わった。

調査報告書では、身体計測による調査は実施困難な調査なので手続き等も付記されている。その中で「本

調査の目的は、日本全国における個人の体格・体型について測定を行った場合、得られるであろう特性値の分布を求めることにあり、これを実施するためには、任意抽出の方法により標本選定を行い、それが母集団の縮図になるよう努力するというたてまえをおろそかにしてはならない」と統計学者の専門委員が主張してゆづらななかった。しかしこの種の調査の困難性や予算の縮小から研究者の周辺で多数の被計測者が得られるような方法をとる以外に適切な方法はないとの結論に達した。大学の所在する中都市と京浜・京阪が候補地として選定され、北海道から鹿児島に至る20大学の該当教員(被服構成学担当者または関連分野の研究者)に対して、条件を添えて内交渉した。条件とは本調査に参加する意向があるか、班の編成が可能であるか、ある程度の経費の負担ができるかであった。と記されている。その結果全国15カ所(中都市13カ所—旭川市、秋田市、福島市、千葉市、長野市、金沢市、静岡市、名古屋市、奈良市、鳥取市、広島市、高知市、鹿児島市、大都市2カ所—京浜地区、京阪地区)で17班が編成され、2年目に各地域を代表するようにと公立の小・中学生を、3年目に幼稚園・高校・大学生を対象に調査を実施した。中都市の被計測者では両親がその県出身者の生徒が8,9割を占めたと記憶している。統計学者の主張にできるだけ沿い、調査データの信頼性の確保に勤めたことがわかる。しかし今日同様な調査が実施できるかと言えば相当に困難である。また、交通、通信の発達は地域性を縮小していると思う。かといって安易なサンプリングはデータの信頼性を損なう。現在でも調査研究におけるデータは出所を明記する大切さを示唆している。

各調査班は、調査責任者、計測責任者、計測者の教員3名で構成され、実施の際は各班の事情に応じて学生アルバイト等を追加した。調査時期については当初

は夏期休暇を予定していたが、実際は生徒がいないので7月後半に集中し、3年目に至っては4月～11月にわたっている。調査対象数は過去の経験から1割は不備カードが出現することを予測して、各班900例のデータを得ることを目的に、各学年男女、9学年で990名の調査を実施することとした。1日110名、9日間の計測を計画し予算化した。各班はそれぞれが計測したデータの使用を許可され、分配額は変更できないが、可能ならば計測項目をプラスしてもよいとされた。解析最小単位を少なくとも50例は確保したいとの考えから上記の実施数となった。しかし50例では数例の異常値が入ると平均値などは大きく異なってくる。少数例では被験者の選択が重要である。各研究者が全体のデータを使用できるようになったのは報告書が公表され、JIS等に結果が反映された後の15、6年後であった。国の事業で得られた国のデータなので個人が勝手に使うことが難しいことはわかるが、データが古くなってからの使用では価値が下がる。

5年後の昭和46、47年に残りの25～65歳を対象に前回の半分の規模の6地区(中都市4カ所—福島市、金沢市、名古屋市、広島市、大都市2カ所—京浜地区、京阪地区)で8班を組織して計測が実施された。このときは計測対象者の確保のために各地区に実行委員会が組織され、県の繊維製品検査所長さんが主に委員長を務められた。成人の計測対象者を集めることの大変さをうかがい知ることができる。これらをまとめて第1次の体格調査としている。

第1次の体格調査結果を基にJIS L 0120が制定されたがあまり普及しなかった。その後、消費者のクレームが増加し、国際標準化機構(ISO)のTC133で各種衣料サイズに対する表示方法の統一化が進行中であることがわかった。そのため工業技術院は昭和51～53年度にJIS衣料サイズ推進協議会に各種衣料に対するサイズ規格原案の作成を委託した。昭和55年3月に一連のサイズシステムとして7種のJISが制定された。これが今日のJIS衣料サイズ規格の元である。しかし第1次の体格調査後10年近くが経過しており、実情にそぐわない部分があるため調査結果を十分に反映で

きなかった。そこで工業技術院はJIS衣料サイズ推進協議会に「既製衣料寸法基準作成のための日本人の体格調査研究」を委託し、昭和53～56年度の4年間にわたって乳幼児から老人までの全国規模の体格調査を実施した。全国13地区(東京都、旭川市、盛岡市、福島市、新潟市、金沢市、静岡市、名古屋市、京都市、大阪市、広島市、高知市、鹿児島市)で15班が組織され、被服構成学領域の大学女子教員が協力した。乳幼児に関しては調査しなかった班もある。乳幼児19項目、幼稚園児26項目、男子33項目、女子35項目が調査項目とされた。2つの班では19～59歳男女について、約20項目を加えた詳細な計測を行った。その結果約46,000例のデータを得ることができた。その報告書の中で、今後は自動計測も視野に入れる必要性が指摘されていた。これが第2次の体格調査である。

その後、平成4年～平成6年に人間生活工学研究センター(HQL)によって全国10地方で7歳から90歳を超えるまで約34,000名を計測対象に第三次の体格調査が実施された。この時は衣服に限らず生活用品全般に活用できるデータベースの構築を目指し、計測項目の範囲が広がった。三次元計測器を積んだ2台のバスが全国を回り、調査を実施した。三次元計測器は工学系のオペレーターにより操作され、問題が残った。手計測と三次元計測の結果178項目が公開発売された。

平成16年～平成18年に人間生活工学研究センター(HQL)が経済産業省委託事業「人間特性基盤整備事業(通称sizeJP2004-06)」として関西と東京の2地区で第4次の体格調査を実施した。成人男女約6,700名の三次元データおよび217項目の寸法データが得られ、公開発売されている。前回同様、多数のデータを購入するには多額の予算が必要であり、参加された研究者がデータを自由に解析することは難しい状況にある。

私は第1次と第2次の体格調査に関わってきたが、第3次と第4次の体格調査には参加していない。しかしいずれの調査においても被服構成学関係の大学教員が多数協力してきた。このことは被服構成学の社会への大きな貢献だったと確信するとともに、今後是非継承していただけたらと願う。

被服構成学研究委員会と被服構成学部会

日本人の体格調査終了後の翌昭和 43 年の日本家政学会総会時に準備会を持ち、昭和 44 年 10 月 2 日、調査を担当した研究メンバーが母体となり 87 名の賛同者が一堂に会して被服構成学研究委員会が誕生した。研究委員会設置の目的は、グループ活動による研究の促進を、学会が援助しようとするもので、年間 5 万円の助成金が付与された。研究委員会のメンバーは一人ひとり人が研究委員であり、共通の場で相互に関連を保ちつつ研究を進めるものであるとし、進めるにあたり、便宜、自然科学的方法を用いて追求する分野を分けた。1. 体型、衣服寸法、衣服型紙など一連の形態学的な諸問題、2. 縫合、くせとりなど布地を扱う場合の諸問題、3. 被服の設計・着装に関する衛生学的な諸問題の 3 分野である。さらに第 4 の分野としてこれら 3 分野の成果を学校教育にどのように取り入れるかを追求する分野としている。発足に先立つアンケートでは、講習会、ゼミナール、共同研究、シンポジウム、講演会、見学会の順に希望が寄せられたと記録が残る。この時、私は幹事として末席におり、研究委員への連絡等事務処理を担当していた。やがて 3 や 4 の分野は部会や学会へと発展していった。

10 年目を迎えた昭和 54 年、被服構成学研究委員会は解散し、日本家政学会の下部組織(部会)として運営されることになった。部会の趣旨は、比較的狭い専門分野の研究者が緊急に研究交流を必要とする場合に期限を決めて設置されるとされた。

研究委員会発足から 35 年、ずいぶんと長い間お世話になったと思う。被服学において被服構成学は中心的存在であると、被服という形になって初めて被服学であると自負してきた。しかし、研究手法から開発を余儀なくされる分野であり、先達のご苦勞は並大抵のものではなかったかと思う。本分野の研究は、家政学的立場、工業生産的立場が混在するが、是非それぞれの立場で研究を深めていってほしいと願う。最近国際学会や国際会議に参加して、日本のこの分野は世界の最先端をいっていると確信した。ただ世界への発信がまだまだ不十分である。

ISO-TC133 (国際標準化機構-技術委員会 133)

私が ISO-TC133 を知ったのは、第 2 次の体格調査が JIS 衣料サイズ推進協議会に委託され、当協議会の会長でいらした石川章一先生とお会いするようになってからである。先生は 1978 年当時から 1991 年の ISO-TR10652 あたりまで、ISO-TC133 への日本の対応を一手に引き受けられていたようである。1979 年 6 月の南アでの第 5 回会議に出席された後、南アが各国の身体寸法を集めた報告書に日本人がどこよりも座高が高いと記載されているとか、翌 1980 年にスエーデンの Göteborg(ヨーティボリ)市にある TEHO(Svenska Textilforskningsinstitutet)に Cednäs 女子に会いに行ったお話やドイツ代表のお話など、TC133 で知り合った海外の方々と積極的に交流を深めていらした様子をお話し下さった。1981 年には被服構成学部会で「既製衣料サイズの国際化」という演題でご講演いただいた。1991 年に ISO-TR10652 が承認された後、この TC は全く動いていなかった。それが 2010 年中国の呼びかけで約 20 年ぶりに総会が開かれ、南アフリカとともに中国が議長国となった。それ以降毎年、総会が開かれ、第 4 回目の総会が昨年フランスで開催された。

ISO(国際規格)がなぜ重要かということ、GATT (General Agreement on Tariffs and Trade 関税貿易一般協定)の GATT Standard Code が 1980 年以降、日本でも発効したからである。すなわち国内の規格を改定する際には ISO に準拠しなければならない。そのために各国は自国の規格に悪影響がないようにとの消極的対応の視点で、あるいは積極的に自国の規格を国際標準にしようとの視点からしごぎを削っているのが現状である。他の数多くの TC では日本も積極的に提案し、日本の主張を ISO 規格にしている。

ISO-TC133 と言われても何?と思う方も少なくない。TC は Technical committee の略で国際規格 ISO を作成する委員会である。通常はその下に Sub-committee (SC)がつくられる。本年度の夏期セミナーで知久氏のご講演にあったように、TC133 のタイトルは、現在、Clothing sizing systems - size

designation, size measurement methods and digital fittings となっている。そこに4つのWG(Working Group)が設置され、WD(Working Draft)やCD(Committee Draft)が回覧され、メンバー国による投票が行われている。WG1は計測項目や計測方法に関するもので中国が招集者をしており、現在CD投票が終わった段階である。WG2はデジタルフィッティングに関するもので韓国が招集者を務め、間もなくDIS投票になりISO規格になると思われる。現在のところCADやE-commerceで用いられる用語の規定にとどまっている。WG3はサイズシステムにおける服種の分類と服種別基本身体寸法の決定が試みられている。フランスが招集者を務めている。これも現在CD投票が終わった段階である。WG4は既製衣料のできあがり寸法の測り方に関するもので南アフリカが招集者をしており、まだWDの段階である。これらの投票には、反対、賛成、コメント付き賛成、棄権などがあり、総会で議論されることになる。

昨年、パリでの総会に参加してよい経験をさせていただいた。公用語は英語であるが、参加者の多くはnativeではない。Broken Englishでも皆さん主張が強い。海外では40歳代、50歳代と思われる方々が積極的に議論をしていた。日本も若い方々に是非参加してほしいと思った。それにはまず、国内の審議委員会などに参加し、議論の内容や日本の立場をよく理解することが大事である。次にエキスパートを担当し、海外の担当者と同等に向き合いたいと思う。TC133に関してはまさに被服構成学の専門領域である。これも被服構成学の社会貢献と思う。現在、大塚美智子先生と私は、TC133の日本での審議団体に指定されている日本アパレル工業技術研究会の委員会に参加し、国内審議委員会の委員を拝命している。また産総研の河内まき子先生と私はWG1、大塚先生はWG3のエキスパートとしてISOに登録している。このような委員会やそのまとめの作業を通して感じたことは、生産現場、産業界の専門家と私たち研究者との乖離である。私たちは大学内にとどまらず、社会や産業界へ積極的に発信し、協同することが大切と感じている。

王道を行く(大学院博士後期課程の設置)

成田順先生はご著書に、「我が国において女子の大学ことに家政学については、初めてのことで従来の男子の大学とは全く異なる構想でなければならぬし、大学令による大学の基礎とすべき何物もなく、……特に被服学においては、識者も一般人も単なる芸芸技術としてのみ考え、学の対象にならないというのであった。」と、昭和24年の新制大学創設にあたってのご苦心を書かれている。被服学は学問としての第一歩をこの時に歩み始めたといってもよいのではないか。

従って、大学教員として必須の博士の学位を取得する道もなく、先達たちは、工学、医学、農学などの他分野で大変な苦勞や努力をされて博士号を取得された。大学院家政学研究科修士課程が設置されたのは昭和38年、博士課程は昭和51年である。

恩師は、研究者は王道を歩むべきだと常々おっしゃっていらした。それは家政学を学んだら家政学の修士、博士の学位を取得できる道を指している。諸先生方が後継者養成に心を砕かれ大学院設置に奔走された結果、今日では多くの大学が大学院博士課程を有している。

この幸せを学生たちに満喫してほしいと願う。また大学の先生方には数多くの院生を育ててほしい。層が厚くなければ学問の発展もあり得ない。

被服構成学の未来に期待する

この稿を書くにあたり、古い資料を読み返し、改めて被服構成学の社会への貢献を再認識した。今日、18歳人口の減少、共学志向に加え、若い研究者が勤めるポストの減少など大学冬の時代の厳しい状況にあることは事実である。しかし人は衣服を着ないではいられない。超高齢社会では生活の質を向上させるために衣の役割も大きい。今回科学研究費基盤研究Aが採択され、部会員で心を合わせて研究を進めようとしていることはすばらしい前進と思う。今の時代を乗り切るには他大学の研究者との協同が欠かせない。一方では受験生にも目を向ける必要がある。受験生の興味関心を高めるためにも家庭科教育、特に被服学教育の充実を図ることが大切である。部会員それぞれの豊かな可能性は明るい未来を切り拓いてくれることと信じている。

若手研究紹介

子どもの衣生活の実態と今後の研究の展開について

—着脱動作と手指の巧緻性との関連から—

目白大学 高橋美登梨

1. 研究の背景

基本的な生活習慣の習得は、発達段階の幼児や高齢者、さらには何らかの理由により動作が制限された場合にも自立した生活を送るための課題である。身の回りの生活用品を見ると、ユニバーサルデザイン等の観点で設計された単純な動作で行えるものが普及している。これらは生活の自立を促す一方で、手指を動かす機会を減少させる側面ももつ。手指の巧緻性の向上は作業効率を向上させるだけではなく、様々な活動への意欲関心、さらには脳の活性化にもつながる。したがって、生活の中で手指を動かすことは重要であると考えられる。

特に、幼児期において、遊びや生活様式の変化により手指を動かす機会が減少していることへの対応として、集団生活の中での取り組みも一つといえる。幼稚園の教育要領および保育所の保育指針の「健康」では、生活に必要な基本的な生活習慣を身に付けることを教育目標の一つに掲げており、園生活は生活動作を身に付ける場として位置付けることができる。生活動作の中でも着脱は、手指の動作と「はおる」、「はく」等の全身運動による動作であるため、細かい操作を伴う衣服は手指の巧緻性をはじめとする運動能力を向上させると期待できる。さらに、日常的に繰り返される動作であり、衣服の形態によっては生活の中で手指の動作を訓練する機会となる可能性を持つ。また、近年、子ども服に関しては事故防止等の観点からJISの策定が行われるなど関心が高まっている。基本的な生活習慣の習得という観点からの衣服の設計も重要であると考えている。

2. 研究目的

本研究の目的は、幼児を取り巻く衣生活の実態を明らかにした上で、細かい操作を伴う着脱動作の習得は手指の巧緻性を向上させる効果があることを検証し、

留め具のある衣服の着用は集団生活の中で行える衣生活の自立を促すのための方策として有効であることを提案することである。

3. 現在明らかになっていること

ここでは、現在までに行った子ども服の変化と子どもを取り巻く衣生活の実態に関する質問紙調査の結果を報告する。

(1) 子ども服の変化¹⁾

生活習慣の自立時期は全体的に遅くなる傾向にあるが、衣服の着脱の時期は早くなっているとの報告がある。この背景には、衣服の生地の変化があると考え、子ども服の雑誌sesameを用いて1983年と2013年の比較を行った。対象アイテムは外衣・中衣・內衣とし、アイテムごとに織物、ニット製品、その他に分けて集計した。対象号は①no. 36 early summer issue (1983年5月)、②no. 38 autumn issue (1983年10月)、③5月号 early summer issue (2013年5月)、④9月号 autumn issue (2013年9月)とした。early summer issueは主に半袖スタイル、autumn issueは長袖スタイル(コートの着用なし)が掲載されている。集計結果の一部を表1-1、表1-2に示す。

early summer issueを比較すると、女兒の上衣ではニットの割合が増加しており、カットソーやプルオーバーが子ども服としても普及しているといえる。autumn issueは、男女共に織物の割合が減少している。上衣の着こなしを見ると、1983年にはブラウスの上にセーターを着ていたが、2013年はカットソーあるいはTシャツの上にカーディガンやジャケットを羽織っていることから、インナーが織物からニット製品へと変化したことが分かる。ニット製品は伸縮性が高く、衣服の前と後ろが理解できれば、着替えは短時間で行える。着脱の自立の時期が早まっていると捉えられるようになって

たのは、ニット製品の普及に伴いかぶり型の衣服が増加する等衣服の形態が変化し、動作が容易になったためと推察される。

表 1-1 early summer issue の比較

		2013年5月			1983年5月		
		織物	ニット	その他	織物	ニット	その他
女児	上衣	27.4	71.6	2.1	34.2	63.3	2.5
	下衣	64.4	28.9	6.7	71.2	26.0	2.7
男児	上衣	38.2	60.1	2.9	36.7	61.7	1.7
	下衣	89.1	10.9	1.0	91.5	8.5	0.0

表 1-2 autumn issue の比較

		2013年9月			1983年10月		
		織物	ニット	その他	織物	ニット	その他
女児	上衣	30.8	58.9	11.4	44.3	54.6	1.1
	下衣	75.1	21.5	2.8	76.5	23.5	0.8
男児	上衣	40.8	52.8	6.4	58.0	42.0	1.8
	下衣	73.4	26.6	1.6	85.5	11.3	3.2

(2) 子どもを取り巻く衣生活の実態

集団生活の中での衣生活の実態について東京都 23 区内の幼稚園・保育所の教諭・保育士を対象に郵送法による質問紙調査を行い、92 園より回答を得た。

回答結果より、幼稚園では約半数、保育所では約 3/4 が日常的に何らかの着脱の場面があること、制服の基本的な組み合わせは「ブラウス+ブレザー+スカートまたはズボン」で上衣の留め具はボタンであること、体操着やスモックの導入理由は動きやすさ生活場面の切り替えであること、園に着てくる(持ってくる)衣服は「ボタンがついていない、被って着やすい、ウエストがゴム」と指定する園もあること等が明らかになった。以上から、制服を導入している園ではボタンの操作等を行う機会がある一方で、着脱しやすい衣服を指定する園がある等、園によって幼児が行う着脱動作は大きく異なるといえる。動作の習得状況は、3 歳児は個人差が大きく、5 歳児になるほとんどの動作を一人で行えるものの衣服を表に返す、たたむといった動作は援助が必要な場合もあると推察される。さらに、保育者は着脱動作を習得する効果を「自信がつく」こと、次いで「着替えを伴う活動がスムーズ」であることと捉えており、「体温調節」や「生活場面の切り替え」への意識は高くなかった。さらに、着脱動作を含む生活習慣の習得の

ためには園での援助も必要であると多くの保育者が考えていた。したがって、着脱動作の習得には園での取り組みも必要だと感じているものの、衣服の機能面からその効果や必要性を実感することは少ないといえる。

以上より、例えば「生活場面の切り替え」は体操着等の導入理由となる一方で、着脱を習得する効果としてあまり実感していない等、園により着脱動作への取り組みや考え方には大きな差があると推察される。

手指の巧緻性を高めるために約 80%は何らかの取り組みをしているものの、約 65%は巧緻性が低下していると感じていた。食事や工作等の遊びの場面で道具がうまく使えない、さらには指先でつまむ、握る、ひねるができない、体全体のコントロールができないという指摘もあった。

4. 今後の展開

幼稚園児(年中クラス)を対象とした着脱動作の実験より、手指の巧緻性が高い園児の方がボタンかけはずしの所要時間が短いことが示唆された²⁾。したがって、留め具の中でもボタンの操作と手指の巧緻性には何らかの関連があると推察される。そこで、留め具等の細かい操作を含む着脱動作を継続的に行うことと手指の巧緻性の関連について幼児を対象に動作実験を行う予定である。

動作実験を行うにあたり、幼児の手指の巧緻性の測定方法や動作実験の方法については検討の余地があると考えている。特に着脱動作に関しては、観察者の声かけ等による影響を受けやすいため、幼児が集中して行える時間等を考慮した実験の内容を検討する。実験手法を確立することは、衣生活分野からの幼児の発達支援にも大きく寄与すると考える。

<引用文献>

- 1) 目白大学社会学部社会情報学科編：「社会をデザインする」，三弥井書店(2013)
- 2) 時田英理子ほか、幼児の衣生活における着脱と自立支援，第 65 回日本衣服学会 要旨集

「第14回全国中学生創造ものづくり教育フェア」報告

東京学芸大学 鳴海多恵子

「全国中学生創造ものづくり教育フェア」は、中学生が競技会や作品展を通して「ものづくり学習」の成果を発表し、表彰されることを通してものづくりの楽しさを体験し、関心意欲を高めること、ものづくり教育の充実と発展、社会への理解・啓発を図る事を趣旨として開催されている。運営は、技術科と家庭科の教員が県単位で役割を分担し、担っている。

第1回は平成12年度であるが、被服製作部門のコンクールは平成14年度第3回から開始された。

本部会は、この活動に対して協賛金での協力の他、製作コンクールの準備段階から関わり、12年間にわたり審査委員長という立場で審査の中心的役割を担っている。また、「被服構成学部長賞」の表彰状と副賞の授与も行っている。さらに、授業や課外活動などで製作した作品のコンクールに対しても2件の「被服構成学部長賞」の表彰状の授与も行っている。これに加え、この3年間は参加者などが自由に参加できる「体験コーナー」を主催者側からの依頼を受けて出展しており、教育界への貢献に努めている。

製作コンクールの題材については、開始時は「とっておきのハーフパンツ」であったが、平成21年度からは「豊かな生活を創るアイデアバッグ」に変更となっている。これは学習指導要領の改正に伴い、製作教材が必ずしも「衣服」としないことが示されたことによるものである。授業での学習活動が反映されるコンクールとなることを配慮した変更である。

今年度は平成26年1月25日(土)・26日(日)に開催された。会場は昨年と同様の東京都江東区の新木場タワーである。

今年度の製作コンクールには17名が参加したが、被服構成学部長賞は、愛知県豊田市立豊南中学校2年生 羽根侑希乃さんに決定した。作品は「肩かけOK、ひきずりOK、そんなようなガラガラBagよ。おばあちゃんへ。愛をこめて」とネーミングされ、高齢者が楽に荷物を運べるように、リュックにも、底についたキャスターでひきずる事もできるアイデアバッグであった(レポート図参照)。「作品コンクール 被服構成学部長賞」は埼玉県鶴ヶ島市立藤中学校3年生 武藤 香さんの「リバーシブルバッグ」で、絵本「おおきなカブ」をテーマに紙芝居ができるように丁寧に作ったアプリケがついているものである(写真1)。もう1件は北区立滝野川紅葉中学校3年生 住川魅珠さん、鈴木梨菜さん、木村鼓さん、関 優実さんの共同作品「反物で作ったミニドレス」であった。「体験コーナー」では並縫いと半返し縫いで作る「ポケット2つのポケットティッシュペーパーホルダー」を準備し、参加者に楽しんでいただいた(写真3)。



写真1



写真2

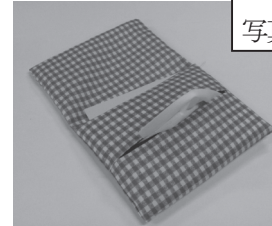
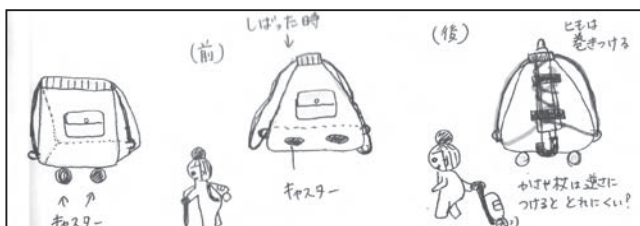


写真3

「第14回全国中学生創造ものづくり教育フェア」報告サイト
http://ajgika.ne.jp/page.php?p=fair_14

関連学会短信

<2013年 ITAA 年次大会>

東京家政大学・相模女子大学・学芸大学(非)

小田 巻 淑子

2013年 ITAA 年次大会は「BUILDING A FORWARD VISION」のテーマのもと10月14日から10月18日まで、米国南部ルイジアナ州ニューオーリンズで開催された。近くには、巨大な貨物船が往来するミシシッピ川や、French Quarter 地区（仏やスペイン統治時代に造られた、独特なバルコニーの建物が並ぶ歴史保存地区）があり、ジャズレストランやアンティークショップなど南部独特の雰囲気に満ちていた。大会参加者は400余名で、日本からは、元広島大学の林隆子先生と私の2名が参加した。

初日、レセプションでは、New Orleans Mardi Gras カルニバルにちなみ、仮面コンテストが催された。会場で、元 ITAA 事務局長 Sandra Hutton ご夫妻に7年ぶりに再会した。（2002年部会研修旅行の際、お世話になった。）退任後、長年の功績により基金が設立され、Fellowship として Hutton 賞が誕生した。

大会中、ワークショップや見学があるが、今回は Textile Conservation Tour に参加した。ニューオーリンズは、historic textile の修復技術が盛んな地域である。Jessica Hack Textile Restoration は、アンティークの衣裳やタペストリーなどを中心に補修復元をおこなっている。補修に使用する材料は、できるだけ同時代の材料を用いるとのこと。棚には、アンティークのビーズ、古い時代と同じ天然染料で染色した糸や残布などが大切に保管されていた。次に訪れた Antique Textile Service は、クリーニングも含めた補修作業を行っていた。古い物を大切に作る米国人らしく、個人からの依頼品も多い。19～20世紀初頭のウエディングドレスなどを美しく蘇らせる技術に感心した。3畳ほどの大きなシンクで、丁寧に付け置き・排水・洗浄を行い、古い絨毯なども蘇らせていた。欧州産のワインしみ抜き剤が経年劣化した素材に適するなど、細やかな配慮と技術が披露された。

Special topics Session 「A History of world Dress」は、フィラデルフィア大会が始まりである。アパレル産業のグローバル化が進む中、欧米中心の服装史教育だ

けで良いのかという、Rhord Island 大学の Linda Welter 先生の問いかけから始まった。その必要性をめぐり議論が白熱し、継続テーマとなりハワイ大会に引き継がれた。今回は、欧米以外の国々の服装の変遷事情が報告され、東アジアからは韓国が代表として発表した。日本による植民地支配下で、学生の制服着用が義務付けられたことが、結果として服装の洋装化につながったと報告された。

Oral Presentation では「Ballet Costume Design : Ultimate Challenge in Function and sustainability」に、興味をもった。現役デザイナーでもあるデラウェア大学の Orzada 教授が、実物を交えて詳細な説明を行った。個人の体型や動きに合わせる為、3～4回はフィッティングを行う。微妙な調整の必要性から殆ど手縫いで制作される。2010年カナダ大会 Workshop で目にしたマダム・グレの作品、ビュスティエの縫製と共通していたのが印象に残った。衣裳の裏面細部は日本人のように拘らないが、美しいシルエットと機能性を創り出す Cutting 技術は素晴らしい。

ITAA は現在、未来を見据えた変革期を迎えている。若い世代の育成や、大学の枠を超えた交流も盛んである。ホームページも充実してきており、過去の Design Exhibition のカタログ集も公開されている。2014年の大会は、11月15日から18日まで米国東部ノースカロライナ州シャーロットで開催される。



◀ Antique Textile Service



▲ Jessica Hack Textile Restoration

<日本繊維製品消費科学会>

名古屋女子大学短期大学部 原田 妙子

日本繊維製品消費科学会 2013 年度年次大会は 6 月 22・23 日に、椚山女学園大学で開催された。総会・学会賞贈呈式に引き続いて、企画発表、研究発表（口頭およびポスター）、企画展示、特別講演、情報交換会が行われた。

企画発表は、3 テーマで行われ、「表示責任者のための取り扱い絵表示 ISO 移行に関するガイドライン作成協議会」では、ISO の表記との整合化をはかり、早ければ 2014 年度には改訂施工される JIS の「取り扱い絵表示」について詳しい説明がなされた。「快適性追及繊維」では、3 社の特徴ある素材の特性が紹介され、「スポーツウェア、今要求される機能とは」では、商品開発の事例が 3 件紹介された。参加者も多く、活気に満ちたものであった。

特別講演は、「グローバル時代に日本はどうあるべきか」のテーマで国際政治学者 青山学院大学 羽場久美子先生により TPP の問題を政治および国際政治の観点から行われた。多くの聴衆を集めタイムリーな講演となった。

研究発表では、材料・染織の文化、染色加工・整理、生理・快適性、心理・ファッション・色彩、構成・衣服製造システム、流通・消費者問題、技術レポート・製品紹介の 7 分野で、口頭発表 79 件、ポスター発表 44 件の発表があった。いずれのフロアでも、課題の多い繊維製品に関して活発な質疑応答が行われていた。また、ポスター発表では、例年行われている一同に介してのスピーチを、ポスター会場前の教室で着席して聞くことが出来たので、その後じっくりとポスターを見ることが出来、質問も多くなされて、真剣で活気にあふれた雰囲気であった。

2 日間での参加者は、総数 275 名であった。多くの方々とお話し、情報交換をすることが出来た。今回、大会に参加して、たくさんの刺激と実りを得て有意義な 2 日間であった。

<日本衣服学会>

横浜国立大学 薩本 弥生

衣服学会の第 65 回（平成 25 年度）年次大会は、平成 25 年 11 月 9 日～12 日に信州大学信州大学 教育学部 N 館（北校舎）2F 201 号室で開催された。発表は口頭発表 14 演題、ポスター発表 5 演題で、被服教育、染色、洗濯、福祉と着衣の運動機能性、着装意識、着衣の快適性、被服材料、服装史、着物文化等に関する内容であった。非常に多様な内容の発表で質疑応答も活発であった。特別講演は「エコから生まれる新スタイル — もったいない」を「かっこよく」と題し、デザイナーの岡 正子氏が解説しながらの若手の学会員や学生がモデルとなりながらのショーを交えて、ご講演いただいた。通常は捨てられてしまっている布端等が活用され再生され布として用いられ、収縮されて伸縮性を持たせて運動機能性を付与するものもあり、パステルカラーで統一されていて、数々の作品はどれもとてもかっこよい着心地のよさそうなデザインのものであった（写真参照）。

1 日目の夕方に懇親会が開催され、信州の郷土料理に舌鼓を打ちながら会員相互の親睦が深められた。

学会後の見学会では信州須坂田中本家博物館（豪商の館田中本家）を訪ね、館長の解説つきで着物や調度品、家具などの見学し、大会長の尽力でVIP待遇で紅葉の美しい庭園が展望できる部屋からの風景を堪能した。



学会員によるショーのモデルと岡先生（右端）

平成 25 年度 研究動向（修士論文テーマ・科学研究費補助金研究課題）

「平成 25 年度修士論文テーマ」

「衣服のデザイン要素が人体に及ぼす生理・心理的影響に関する研究」 鷺崎 ハイジ（指導：富田 明美）
椋山女学園大学大学院生活科学研究科生活環境学専攻

「肢体不自由の子どもたちのための衣料の工夫と開発ー身体障害のある子どもにも介護する人にも優しく、着心地のよい衣料を考えるー」 石川敦子（指導：川端博子） 埼玉大学大学院教育学研究科教科教育専攻家政教育専修

「衣服の着心地に関わる教育プログラムの開発をめざした研究」 中田いずみ（指導：薩本弥生） 横浜国立大学大学院 教育学研究科 教育実践専攻 教育デザインコース家政領域

「骨盤矯正下着の効果と姿勢への影響」 森田晴香（指導：大塚美智子） 日本女子大学大学院家政学研究科被服学専攻

「平成 25 年度 科学研究費補助金 研究課題」

基盤研究（A）

「無線通信による熱中症予防支援システムの構築と被服環境デザインの最適化」、平成 23 年から 26 年度、研究代表者：薩本弥生

「アパレルの質と国際競争力向上の基盤となる日本人の人体計測データの構築と多角的分析」、平成 25 年から 30 年度、研究代表者：大塚 美智子

基盤研究（B）

「オンデマンドファッションを利用したユニバーサルファッションの実現」、平成 23 年から 25 年度、研究代表者：渡邊敬子

「エシカルな 3 次元エルダーファッションシステムの開発」、平成 25 年から 28 年度、研究代表：増田 智恵、

基盤研究（C）

「衣生活の改善による授乳期の女性への支援」、平成 23 年から 25 年度、研究代表者：埼玉大学・川端博子

「肢体不自由児・者のズボンの着脱動作解析と自立を助ける修正衣服の開発」、平成 23 年から 25 年度、研究代表者：熊本大学・雙田珠己

「東北の刺し子の文様特性に関する研究」，平成 23 年から 25 年度，研究代表者：福島大学・千葉桂子

「量産衣料用デジタル仮縫い工房」開発のための人体の 3 次元形状推定システムの検討」，平成 23 年から 25 年，研究代表者：大妻女子大学短期大学部・土肥麻佐子

「体形と筋負担を考慮したパーソナルファッションのための基礎的研究」，平成 23 年から 25 年度，研究代表者：広島大学・村上かおり

「スタイル画の感性価値を活かした衣服デザインの創造的設計支援システムの開発」，平成 23 年から 25 年度，研究代表者：滋賀県立大学・森下あおい

「幼児期の手指の巧緻性の実態と発達」，平成 24 年から 26 年度，研究代表者：東京学芸大学・鳴海多恵子

若手研究 (B)

「布の「しっとり」感に関する素材物性の客観評価」，平成 22 年から 24 年，武庫川女子大学短期大学部・末弘由佳理

「健康な高齢者のための外観と安全・機能性を兼ね備えたズボン設計に関する研究」，平成 23 年から 25 年度，和洋女子大学・柴田優子

((注) 継続研究と部会員の皆様への呼びかけに対してお申し出頂いた分のみを掲載しました。)

会 務 報 告

1. 平成 25 年度会務報告

1) 事業報告

① 総 会

日時：平成 25 年 5 月 18 日（土）

場所：昭和女子大学 E 会場 3S07 教室

② 日本家政学会大会活性化企画講演会

「化粧の変遷 女性の美しさと共に」

日時：平成 25 年 5 月 18 日（日）

場所：昭和女子大学 大学 1 号館 3 階 F 会場

③ 夏期セミナー

「アパレルに生かす人体計測の取り組み」

日時：平成 25 年 8 月 29 日（木）・8 月 30 日（金）

場所：倉敷ファッションセンター

④ 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援

日時：平成 25 年 1 月 25 日（土）26 日（日）

場所：新木場センター

⑤ 研究例会

「きもの文化の伝承と国内外への発信」

日時：平成 26 年 3 月 8 日（土）

場所：日本女子大学 百年館高層棟 5F 502, 503

⑥ 部会誌 35 号発行 平成 26 年 3 月 31 日（月）

⑦ ホームページの維持管理

⑧ 科学研究費（基盤研究（A））研究活動

2) 庶務報告

① 第 1 回運営委員会

日時：平成 25 年 4 月 13 日（土）

場所：日本女子大学 百年館低層棟 6F

被服構成学実習室

- (1) 平成 25 年度運営委員会および総会の開催予定について

(2) 総会の準備について

(3) H25 年度研究例会について

(4) 名誉会員について

(5) 監査報告

(6) H25 年度夏期セミナーについて

(7) 科研費研究課題（基盤研究(A)）の活動計画について

(8) 部会誌第 35 号編集案について

(9) H25 年度前期家政学会助成金申請について

(10) 各係からの報告と問題提起

② 第 2 回運営委員会

日時：平成 24 年 5 月 18 日（土）

場所：昭和女子大学 E 会場 3S07 教室

(1) 平成 25 年度総会準備

(2) 科研費研究活動について

(3) 部会誌第 35 号編集案について

(4) H25 年度研究例会について

(5) 夏期セミナーの予算案の訂正

③ 第 3 回運営委員会

日時：平成 25 年 8 月 29 日（木）

場所：倉敷ファッションセンター

(1) 平成 25 年度研究例会の本部助成金申請および日程等について

(2) 平成 26 年度夏期セミナーについて

(3) 次期部長および監事の推薦について

(4) 部会誌 35 号編集案について

(5) 科学研究費課題の進捗状況報告

(6) 各係からの報告と問題提起

3) 会計報告 (次頁以降参照)

2. 平成 26 年度事業計画 (案)

① 総会

日時：平成 26 年 5 月 24 日(土)

場所：北九州国際会議場

② 夏期セミナー

日時：平成 26 年 8 月 28 日(木)

場所：アルカディア市ヶ谷

③ 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援

日時：平成 27 年 1 月下旬

場所：新木場センター (予定)

④ 研究例会

⑤ 部会誌 36 号の発行

⑥ ホームページの維持管理

⑦ 科学研究費の研究活動

⑧ その他

平成24年度 被服構成学協会 夏期セミナー 収支報告書

◆夏期セミナー

収入の部

費目	予算	決算	備考
参加費	220,000	220,000	会員 5,000円×44名
学会活動助成金	100,000	100,000	
部会会計より補助費	340,000	340,000	
合計	660,000	660,000	

支出の部

費目	予算	決算	備考
1 会場費	160,000	156,450	
2 講師謝礼	130,000	192,221	徴収税 29,221円を含む
3 要旨集	80,000	84,840	
4 旅費交通費	90,000	7,860	
5 通信運搬費	20,000	27,140	
6 印刷費	20,000	3,206	
7 雑費	30,000	22,680	
8 会議費	100,000	78,028	
9 予備費	30,000	0	
合計	660,000	572,425	

差引残高

660,000-572,425=87,575

◆懇親会

収入の部

費目	予算	決算	備考
懇親会費	218,000	234,000	会員・非会員 5,000円×44名 学生 2,000円×7名
部会会計より補助費	32,000	32,000	
合計	250,000	266,000	

支出の部

費目	予算	決算	備考
特別食	193,200	193,200	
飲み物	56,800	38,955	
合計	250,000	232,155	

差引残高

266,000-232,155=33,845

会計 渡部 句子 田中 早苗 中村 邦子

※本部より指摘があり、支出の講師謝礼と旅費交通費の金額変更4/16

貸借対照表（被服構成学部会）

（平成25年3月31日現在）

科 目	当年度	前年度	増減
I 資産の部			
1. 流動資産			
手許現金	277	649	▲ 372
普通預金(三菱東京UFJ銀行国分寺支店)	354,967	283,709	71,258
振替口座(ゆうちょ銀行上十条支店)	145,520	161,485	▲ 15,965
流動資産合計	500,764	445,843	54,921
2. 固定資産			
部会大会基金引当預金			
定期預金(三菱東京UFJ銀行国分寺支店)	1,500,000	2,000,000	▲ 500,000
固定資産合計	1,500,000	2,000,000	▲ 500,000
資産合計	2,000,764	2,445,843	▲ 445,079
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払い金	-	-	0
負債合計	-	-	0
III 正味財産の部			
正味財産			
1. 指定正味財産			
2. 一般正味財産	2,000,764	2,445,843	▲ 445,079
負債及び正味財産合計	2,000,764	2,445,843	▲ 445,079

監 査 報 告 書

一般社団法人 日本家政学会
会 長 久保田 紀久枝 殿


私ども監事は、平成24年4月1日から平成25年3月31日までの平成24年度の部会の重要な会議に出席するほか、事業報告を開き、重要な書類を閲覧し、主要な調査を行い、かつ財務諸表及び収支計算書につき監査を実施した結果、次のとおり報告します。


1. 事業報告は規程に従い、部会の状況を正しく示しているものと認めます。
2. 財務諸表すなわち貸借対照表、正味財産増減計算書及び財産目録は平成24年度期末現在の財政状態を正しく示していると認めます。
3. 収支計算書は平成24年度の収支の状況を適正に表示していると認めます。
4. 理事の職務遂行に関する不正の行為または定款に違反する重大な事実は認められません。

以上

平成25年 4月 13日

一般社団法人 日本家政学会
(被服構成学) 部会

監事 大村知子 

監事 布施谷節子 

(被服構成学部会)収支計算書

(平成24年4月1日から平成25年3月31日まで)

科 目	予算	決算	備考
I 事業活動収支の部			
1. 事業活動収入			
基本財産運用益	0	0	
受取入会金	0	0	
受取会費	300,000	300,000	部会費120名分
事業収入	400,000	454,000	
会誌購読料	0	0	
大会等参加費	400,000	454,000	夏期セミナー220,000、懇親会234,000
広告料	0	0	
学会刊行物売上	0	0	
著者負担金	0	0	
受取補助金	0	0	
一般寄付金	0	0	
特別寄付金	0	0	
雑収入	3,000	479	
本部からの繰入金収入	100,000	100,000	
事業活動収入計	803,000	854,479	
2. 事業活動支出			
① 事業費支出			
大会等関連費用	3,000	0	
講演会等関連費用	640,000	825,299	セミナー494,397、懇親会232,155、研究例会98,747
学会誌等関連費用	80,000	169,650	部会誌61,650、スクールソーイング10,8000
研究発表要旨集関連費用	0	0	
研究補助費	0	0	
表彰費	20,000	9,516	ものづくりフェア部長賞
関連学会費	10,000	10,000	ものづくりフェア協賛金
給料手当	0	0	
広報費	35,000	33,150	HP契約・維持管理
福利厚生費	0	0	
旅費交通費	50,000	142,510	委員会98,580、次期セミナー34,230、会計監査9,700
通信運搬費	40,000	8,510	
備品費	0	0	
消耗品費	5,000	0	
光熱水料費	0	0	
雑費	20,000	0	
総会費	0	0	
事務委託費	0	0	
租税公課	0	0	
地代	0	0	
会議費	130,000	97,663	委員会19,635、セミナー78,028
支払負担金	5,000	3,260	
印刷費	5,000	0	
諸謝金	0	0	
修繕費	0	0	
減価償却費	0	0	
リース料	0	0	
事務所管理費	0	0	
② 管理費支出			※法人会計科目につき省略
事業活動支出計	1,043,000	1,299,558	
事業活動収支差額	▲ 240,000	▲ 445,079	
II 投資活動収支の部			
1. 投資活動収入	365,000	500,000	
2. 投資活動支出			
投資活動収支差額	365,000	500,000	
III 財務活動収支の部			
1. 財務活動収入			
2. 財務活動支出			
財務活動収支差額	0	0	
IV 予備費支出			
当期収支差額	125,000	54,921	
前期繰越収支差額	445,843	445,843	
次期繰越収支差額	570,843	500,764	

(被服構成学協会)収支予算書

(平成25年4月1日から平成26年3月31日まで)

科目	H25年度予算	H24年度予算	H24-H25	備考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
基本財産運用益	0	0	0	
受取入会金	0	0	0	
受取会費	300,000	300,000	0	部会費120名
事業収入	450,000	400,000	50,000	
会誌購読料	0	0	0	
大会等参加費	450,000	400,000	50,000	夏期セミナー250,000、懇親会200,000
広告料	0	0	0	
学会刊行物売上	0	0	0	
著者負担金	0	0	0	
受取補助金	0	0	0	
一般寄付金	0	0	0	
特別寄付金	0	0	0	
雑収入	3,000	3,000	0	
本部からの繰入金収入	100,000	100,000	0	
事業活動収入計	853,000	803,000	50,000	
2. 事業活動支出				
① 事業費支出				
大会等関連費用	3,000	3,000	0	
講演会等関連費用	800,000	640,000	160,000	夏期セミナー、懇親会、研究例会
学会誌等関連費用	80,000	80,000	0	部会誌印刷・郵送
研究発表要旨集関連費用	0	0	0	
研究補助費	0	0	0	
表彰費	20,000	20,000	0	ものづくりフェア部会長賞
関連学会費	10,000	10,000	0	ものづくりフェア協賛金
給料手当	0	0	0	
広報費	35,000	35,000	0	HP契約・維持管理
福利厚生費	0	0	0	
旅費交通費	150,000	50,000	100,000	運営委員会、会計監査
通信運搬費	40,000	40,000	0	
備品費	0	0	0	
消耗品費	5,000	5,000	0	
光熱水料費	0	0	0	
雑費	20,000	20,000	0	
総会費	0	0	0	
事務委託費	0	0	0	
租税公課	0	0	0	
地代	0	0	0	
会議費	130,000	130,000	0	運営委員会、会計監査
支払負担金	5,000	5,000	0	振込手数料
印刷費	5,000	5,000	0	運営委員会、総会運営費
諸謝金	0	0	0	
修繕費	0	0	0	
減価償却費	0	0	0	
リース料	0	0	0	
事務所管理費	0	0	0	
② 管理費支出				※法人会計科目につき省略
事業活動支出計	1,303,000	1,043,000	260,000	
事業活動収支差額	-450,000	-240,000	▲ 210,000	
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入	450,000	365,000	85,000	
2. 投資活動支出				
投資活動収支差額	450,000	365,000	85,000	
III 財務活動収支の部				
1. 財務活動収入				
2. 財務活動支出				
財務活動収支差額	0	0	0	
IV 予備費支出				
当期収支差額	0	125,000	▲ 125,000	
前期繰越収支差額	500,764	445,843	54,921	
次期繰越収支差額	500,764	570,843	▲ 70,079	

お 知 ら せ

1. 会費納入について

平成 26 年度の被服構成学部会費 2500 円は、5 月中に下記郵便払込口座にご送金くださるよう、お願い申し上げます。また、過年度未納の方には別紙にてお知らせいたしましたので、併せてご送金ください。

郵便払い込み口座 00160-2-322300 日本家政学会被服構成学部会

なお、会費に関するお問い合わせは、下記にお願い致します。

〒102-8357 東京都千代田区三番町12番地

大妻女子大学 短期大学部 家政科 中村 邦子 宛

TEL・FAX：03-5275-5266

E-mail：nakamuraku@otsuma.ac.jp

2. 入退会、住所変更等について

お届け、お問合せは下記までお願いいたします。

〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500

滋賀県立大学 人間文化学部 生活デザイン学科 森下 あおい 宛

TEL：0749-28-8425/FAX：0749-28-8549

E-mail：morishita@shc.usp.ac.jp

※ 入会申込書および変更届、退会届の書式は最終ページをご参照下さい。

※ なお、退会届につきましては（社）日本家政学会の退会手続きとは別処理になっていますので、部会への手続きも併せてさせていただきますようお願いいたします。

3. E-mail アドレスについて

E-mail アドレスの登録にご協力いただきありがとうございます。アドレスをお持ちの方でまだ登録いただいていない方は、平成 26 年度会費納入の際に振り込み用紙の通信欄にご記入いただければ幸いです。またアドレスの変更がある場合には、なるべくすみやかにお知らせくださいますようお願い申し上げます。

4. 平成25年度新入会員

角田千枝（相模女子大学）

小柴朋子（文化学園大学）

ご案内

平成26年度 夏期セミナー 予告

日程 平成26年8月28日（木）
10:00～16:30
前日 17:30～ 懇親会

会場 アルカディア市ヶ谷

テーマ 「次世代につなぐ服づくりの技」
(仮題)

一般社団法人日本家政学会被服構成学部会規約

- 第1条（名 称） 本会は、一般社団法人日本家政学会被服構成学部会と称する。
- 第2条（目 的） 本会は、会員相互の研究に関する連絡及び協力をはかり、被服構成学に関する教育・研究を促進することを目的とする。
- 第3条（事 業） 本会は、前述の目的を達成するため次の事業を行う。
- 1 総会を開催する。
 - 2 被服構成学に関する研究・討議・講演などを行う。
 - 3 部会誌を発行する。
 - 4 その他の必要な事業を行う。
- 第4条（会 員） 本会の会員は、次のとおりとする。
- 1 正会員 被服構成学及びこれに関係する分野を研究する一般社団法人日本家政学会会員で、本部会の目的に賛同して入会した個人。
 - 2 名誉会員 元部会長、または、特に部会の発展に寄与した会員で、70歳を越えた場合に、運営委員会の議決をもって推薦された者。
- 第5条（入 会） 本会に入会を希望する者は、所定の入会申込書を部会長に提出し、運営委員会の承認を得るものとする。
- 第6条（退 会） 会員が退会しようとするときは、その旨を部会長に届け出るものとする。
この場合、既納の会費は返却しない。
- 第7条（役 員） 本会に次の役員をおく。
- 部会長 1名
副部会長 2名
運営委員 若干名
監 事 2名
- 第8条（役員の選任） 役員の選任は、次のとおりとする。
- 1 部会長及び監事は、運営委員会がこれを推薦して、総会で選任する。部会長の選任および解任は、理事会の承認を受けるものとする。
 - 2 副部会長及び運営委員は、部会長がこれを推薦し、会員に報告する。
- 第9条（役員の任期）
- 1 役員の任期は2年とし、再任を妨げない。
 - 2 役員の再任については、申し合わせを別に定める。
- 第10条（役員の職務） 役員の職務は次のとおりとする。
- 1 部会長は部会を代表して会務を統轄し、事業計画および予算、事業報告および決算を毎事業年度、理事会に報告する。
 - 2 副部会長は部会長を補佐し、必要な場合には部会長の職務を代行する。
 - 3 運営委員会は本会の業務を運営する。
 - 4 監事は本会の会計監査を行う。
- 第11条（役員の解任） 役員が次の各号の一に該当するときは、解任を運営委員会で動議し、総会で決議する。
- 1 心身の故障のため職務の執行に堪えないと認められるとき。

2 職務上の義務の違反, その他役員たるにふさわしくない行為があると認められたとき.

第12条(会計) 本会の会計は次のとおりとする.

1 経費は正会員の会費, その他をもってまかなう.

2 会計年度は, 毎年4月1日に始まり, 翌年3月末日に終了する.

第13条(規約の改廃) 本規約の改廃は総会において承認を受け, 理事会に報告する.

以上

附 則

1 施行に関する内規は別に定めることができる.

2 この会則の施行は昭和54年10月8日からとする.

3 この会則の一部改正の施行は昭和59年8月3日からとする.

4 この会則の一部改正の施行は昭和63年8月1日からとする.

5 社団法人日本家政学会部会規定に基づき, 平成15年8月27日から被服構成学部会会則を廃止し, 社団法人日本家政学会被服構成学部会規約とする.

6 この規約の施行は平成15年8月27日からとする.

7 社団法人日本家政学会部会規定に基づき, 平成18年8月22日から被服構成学部会規約を廃止し, 社団法人日本家政学会被服構成学部会会則とする.

8 この会則の施行は平成18年8月22日からとする.

9 社団法人日本家政学会部会運営規程および部会運営規程細則に基づき, 平成22年5月29日から被服構成学部会会則を廃止し, 社団法人日本家政学会被服構成学部会規約とする.

10 この規約の一部改正の施行は平成22年5月29日からとする.

11 この規約の一部改正施行は平成24年5月12日からとする.

一般社団法人日本家政学会被服構成学部会申し合わせ

- 1 運営委員会 運営委員会は、部会長、副部会長、運営委員、監事で構成し、その中に庶務、会計、企画、広報、編集担当をおく。
- 2 役員の任期 (1) 規約第9条に従って部会長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、継続して3期はつとめられない。
(2) 運営委員の任期はできるだけ2期4年間とし、その交代は半数ずつ交互に行うことが望ましい。期間をあけての再任は、これを妨げない。
- 3 運営委員の選任 運営委員の選任にあたっては、できるだけ部会員が在住する広範な地区から選ぶように配慮する。
- 4 事務局幹事 (1) 必要に応じて事務局幹事をおくことができる。
(2) 事務局幹事は若干名とし、部会長がこれを指名する。
(3) 事務局幹事は役員会に同席することができるが、議決権は持たない。
- 5 事務局 事務局は、原則として部会長のもとにおく。
- 6 申し合わせの改廃 運営委員会の議を経て、総会で承認し、理事会に報告する。

附則

- 1 この申し合わせは、平成15年8月27日から施行する。
- 2 この申し合わせの一部改正施行は、平成18年8月22日からとする。
- 3 この申し合わせの一部改正施行は、平成24年5月12日からとする。

平成 24・25 年度役員

部会長 鳴海多恵子 東京学芸大学
副部会長 大塚美智子 日本女子大学
森 由紀 甲南女子大学

運営委員

(庶務) 土肥麻佐子 大妻女子大学
短期大学部
原田 妙子 名古屋女子大学
短期大学部
石垣 理子 昭和女子大学
(会計) 服部由美子 福井大学
田中 早苗 東京家政大学
中村 邦子 大妻女子大学
短期大学部
(企画) 増田 智恵 三重大学
川端 博子 埼玉大学
小山 京子 美作大学
(広報) 雙田 珠己 熊本大学
薩本 弥生 横浜国立大学
(編集) 渡邊 敬子 京都女子大学
鈴木 明子 広島大学
(監事) 大村 知子 静岡大学名誉教授
布施谷節子 和洋女子大学

事務局 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1
東京学芸大学 生活科学講座
TEL 042-329-7439 (ダイヤルイン)
FAX 042-329-7439
E-mail narumi@u-gakugei.ac.jp

平成 26・27 年度役員

部会長 森 由紀 甲南女子大学
副部会長 大塚美智子 日本女子大学
鈴木明子 広島大学

運営委員

(庶務) 森下あおい 滋賀県立大学
小山京子 美作大学
石垣理子 昭和女子大学
(会計) 中村邦子 大妻女子大学
短期大学部
渡部旬子 文化学園大学
葛西美樹 東北女子大学
(企画) 川端博子 埼玉大学
服部由美子 福井大学
滝沢 愛 椛山女学園大学
(広報) 薩本弥生 横浜国立大学
丸田直美 共立女子大学
(編集) 十一玲子 神戸女子大学
土肥麻佐子 大妻女子大学
短期大学部
村上千おり 広島大学
(監事) 布施谷節子 和洋女子大学
鳴海多恵子 東京学芸大学

事務局 〒658-0001 神戸市東灘区森北町 6-2-23
甲南女子大学 人間科学部 生活環境学科
Tel & Fax : 078-413-3004
E-mail : moriyuki@konan-wu.ac.jp

(社)日本家政学会 被服構成学部会入会申込書および変更届, 退会届

入会 変更 退会 (いずれかを○で囲む)	申込年月日 年 月 日		受付年月日 年 月 日	
	ローマ字			
	氏名	氏	名	
	西暦	19 年生	性別	男・女 (どちらかを○で囲む)
家政学会所属支部				
自宅住所	〒(-)			
	TEL		FAX	
	E-mail			
勤務先・職名 および所在地	勤務先		職名	
	〒(-)			
	TEL		FAX	
	E-mail			
専門分野	<研究分野> <担当授業科目>			
最終学歴				
学位				
部会誌送付先	自宅・勤務先 (どちらかを○で囲む)			

太線枠内は必ず記入してください。細線枠内は差支えない範囲でお書きください。

退会の場合は、今後、連絡する必要がある場合に備えて、連絡がつく自宅か勤務先の情報をご記入ください。

お届けは「お知らせ」ページの宛先まで、添付メールまたは郵送にてご提出下さい。

部会費は「お知らせ」ページの口座にご送金ください。

* 個人情報保護には十分に注意をいたします。

なお、書式を被服構成学部会ホームページからダウンロードしてお使いいただくこともできます。

URL: <http://h-kohsei.com>

編集後記

部会誌の編集及び執筆にご協力いただいた先生方に心よりお礼申し上げます。本号は、被服構成学に多大な功績を残された3名の先生方を追悼する号となりました。お心のこもったお言葉をいただきました皆様に感謝いたします。また、高部啓子先生には「被服構成学とともに歩んだ日々を振り返る」と題して、これまでのご研究の成果をまとめていただきました。多くの先生方の研究や教育活動の成果によって現在の被服構成学の発展があり、足跡を刻んでいることをありがたく思います。それぞれに課された使命を全うすべく日々精進していきたいと思えます。

(渡邊・鈴木)

平成 26 年 3 月 31 日・発行

発行：(社) 日本家政学会 被服構成学部会

印刷：株式会社ニシキプリント

TEL：082-277-6954

